スヿヲ許サヽル場合ハ此限ニ在ラス

又私訴ハ別ニ民事裁判所ニ之ヲ爲スヿヲ得

第五條　公訴私訴ノ裁判ハ管轄裁判所ニ於テ現ニ施行スル法律ニ定メタル訴訟手續ニ從ヒ之ヲ爲ス可シ

第六條　刑事裁判所又ハ刑事裁判所ト民事裁判所トニ於テ公訴私訴並起ル時ハ公訴ノ裁判ニ先テ私訴ノ裁判ヲ爲ス可カラス若シ賠償返還ノ言渡アリタル後刑ノ言渡アリタル時ハ共ニ其效ナカル可シ

第七條　民事裁判所ニ私訴ヲ爲シタル時ハ檢察官ノ起訴アルニ非サレハ願下ヲ爲シ更ニ刑事裁判所ニ其訴ヲ爲スヿヲ得ス

刑事裁判所ニ私訴ヲ爲シタル時ハ被告人ノ承諾ヲ得テ願下ヲ爲シ更ニ民事裁判所ニ其訴ヲ爲スヿヲ得

第八條　被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ民法ニ從ヒ被害者ヨリ賠償返還ヲ要ムルノ妨礙ト爲ルヿナカル可シ

第九條　公訴ヲ爲スノ權ハ左ノ條件ニ因テ消滅ス

一　被告人ノ死去

二　告訴ヲ待テ受理ス可キ事件ニ付テハ被害者ノ棄權又ハ私和

三　確定裁判

四　犯罪ノ後頒布シタル法律ニ因リ其刑ノ廢止

五　大赦
六　期滿免除

第十條　私訴ヲ爲スノ權ハ左ノ條件ニ因テ消滅ス
一　被害者ノ棄權又ハ私和
二　確定裁判
三　期滿免除

第十一條　公訴期滿免除ノ期限左ノ如シ
一　違警罪ハ六月
二　輕罪ハ三年
三　重罪ハ十年

第十二條　私訴期滿免除ノ期限ハ被害者無能力ナル時又ハ民

事裁判所ニ其訴ヲ爲シタル時ト雖モ公訴期滿免除ノ期限ト同一ナリトス
公訴ニ付キ既ニ刑ノ言渡アリタル時ハ民法ニ定メタル期滿免除ノ例ニ從フ

第十三條　公訴私訴期滿免除ノ期限ハ犯罪ノ日ヨリ起算ス但繼續犯罪ニ付テハ其最終ノ日ヨリ起算ス

第十四條　期滿免除ハ刑事裁判所ニ於テ檢察官若クハ民事原告人ヨリ起訴ノ手續ヲ爲シ又豫審若クハ公判ノ手續アリタルニ因リ其期限ノ經過ヲ中斷ス
其未タ發覺セサル正犯從犯及ヒ民事擔當人ニ付テモ亦同シ
期滿免除ノ期限ノ經過ヲ中斷シタル時ハ起訴豫審又ハ公判

ノ手續ヲ止メタル日ヨリ更ニ其期限ヲ起算ス但前後ノ日數ヲ通算シテ第十一條ニ定メタル期限ノ二倍ヲ超過ス可カラス

第十五條　起訴豫審又ハ公判ノ手續其規則ニ背キタルニ因リ無効ニ屬スル時ハ期滿免除ノ期限ノ經過ヲ中斷スルノ效ナカル可シ但裁判官ノ譴輕過ナルニ因リ其手續ノ無效ニ屬スル時ハ此限ニ在ラス

第十六條　被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタル場合ニ於テ其訴訟ノ原由告訴人告發人又ハ民事原告人ノ惡意若クハ重キ過失ニ出テタル時ハ是等ノ者ニ對シ損害ノ償ヲ要ムルヿヲ得

被告人刑ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ告訴人告發人又ハ民事原告人ヨリ惡意若クハ重キ過失ニ因リ其犯罪ニ付キ過實ノ申立ヲ爲シタル時亦同シ

民事原告人豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ上訴ヲ爲シ敗訴シタル時ハ被告人其上訴ニ因リ生シタル損害ノ償ヲ要ムルヿヲ得

要償ノ訴ハ本案ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ其裁判所ニ之ヲ爲スヿヲ得

第十七條　被告人無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ裁判官檢察官書記又ハ司法警察官ニ對シ要償ノ訴ヲ爲スヿヲ得ス但是等ノ官吏被告人ニ對シ故意ヲ以テ損害ヲ加ヘ又ハ刑法ニ定メ

タル即チ犯シタル場合ハ此限ニ在ラス

第十八條　此法律ニ於テ期限ヲ計算スルニ時ヲ以テスル者ハ即時ヨリ起算シ日ヲ以テスル者ハ初日ヲ算入セス若シ最終ノ日休暇ニ當ル時ハ期限ニ算入ス可カラス但期滿免除ノ期限ハ此限ニ在ラス

一日ト稱スルハ二十四時ヲ以テシ一月ト稱スルハ三十日ヲ以テシ一年ト稱スルハ曆ニ從フ

第十九條　此法律ニ定メタル期限ニハ陸路八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ加フ八里ニ滿サル者ト雖モ三里以上ナル時亦同シ

島地又ハ外國トノ路程ノ猶豫ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第二十條　此法律ニ於テ訴訟ヲ爲スニ付キ定メタル期限ヲ經

過シタル時ハ特別ノ場合ヲ除クノ外其權ヲ失フ可シ

第二十一條　訴訟關係人ハ裁判所ノ在ル地ニ住セサル時ハ其地ニ假住所ヲ定メ書記局ニ屆置ク可シ否ラサル時ハ書類ノ送達ナシト雖モ異議ヲ申立ルヿヲ得ス

第二十二條　此法律ニ於テ訴訟關係人ニ書類ヲ送達スルニ付キ別ニ規則アラサル時ハ書記其送達書ヲ作リ書記局所屬ノ使丁ヲシテ之ヲ送達セシム

若シ書類ノ送達ヲ受ク可キ者裁判所ノ管轄地外ニ在ル時ハ其地ノ裁判所ノ書記ニ送達ノ事ヲ囑託ス可シ

第二十三條　送達書ハ二通ヲ作リ其一通ヲ本人ニ渡ス可シ本人ニ渡スヿヲ得サル時ハ其住所ニ於テ同居ノ親屬又ハ雇人

ニ渡ス可シ

送達人ハ之ヲ受取リタル者ナシテ其二通ニ署名捺印セシム

若シ署名捺印スルヿ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

同居ノ親屬又ハ雇人ニ書類ヲ渡スヿヲ得ス若クハ是等ノ者之ヲ受取ルヿヲ肯セサル時ハ其地ノ戸長ニ渡置キ戸長ハ其書類ニ認印シ速ニ本人ニ送達スルノ處分ヲ爲ス可シ

送達人ハ書類ヲ受取リタル者ノ氏名場所及ヒ日時ヲ其二通ニ記載ス可シ

本條ノ規則ニ背キタル時ハ書類送達ノ效ナカル可シ

送達人ハ其一通ヲ書記局ニ還納シ書記局ニ於テハ送達ノ證トシテ之ヲ保存ス可シ

第二十四條　休暇ノ日及ヒ日出前日沒後ハ書類ノ送達ヲ爲ス可カラス此規則ニ背キタル時ハ其送達ノ效ナカル可シ但本人承諾シテ其送達ヲ受ケタル時ハ此限ニ在ラス

第二十五條　官吏ノ作ル可キ書類ハ其所屬官署ノ印ヲ用ヒ年月日及ヒ場所ヲ記載シテ署名捺印シ每葉ニ契印ス可シ若シ官署ノ印ヲ用フルヿ能ハサル場合ニ於テハ其事由ヲ記載ス可シ此規則ニ背キタル時ハ其書類ノ效ナカル可シ

官吏ニ非サル者ノ作ル可キ書類ニハ本人自ラ署名捺印ス可シ若シ署名捺印スルヿ能ハサル時ハ官吏ノ面前ニ於テ作リタル場合ヲ除クノ外立會人代署シ其事由ヲ記載ス可シ

第二十六條　官吏其他何人ニ限ラス訴訟ニ關スル書類ノ正本

又ハ謄本ヲ作ルニ付キ文字ヲ改竄ス可カラス若シ挿入削除及ヒ欄外ノ記入アル時ハ之ニ認印ス可シ文字ヲ削除スル時ハ之ヲ讀得可キ爲メ字體ヲ存シ其數ヲ記載ス可シ此規則ニ背キタル時ハ其變更增減ノ效ナカル可シ

第二十七條　此法律ニ於テ定メタル豫審又ハ公判ニ付テノ規則ハ頒布以前ニ係ル犯罪ニモ亦之ヲ適用ス

頒布以前ニ爲シタル訴訟手續當時ノ法律ニ背カサル時ハ其效アリトス

第二十八條　此法律ハ將來頒布ス可キ別段ノ法律ニ於テ豫審又ハ公判ノ手續ヲ定メタル犯罪ニモ亦之ヲ適用ス但其法律ニ抵觸スル規則ハ此限ニ在ラス

從前頒布シタル別段ノ法律ニ於テ豫審又ハ公判ノ手續ヲ定メタル犯罪ニ付テハ前項ノ例ニ在ラス

第二十九條　此法律ハ陸海軍ニ關スル法律ヲ以テ處分ス可キ者ニ適用スルヿヲ得ス

第三十條　此法律ニ於テ親屬ト稱スルハ刑法第百十四條第百十五條ノ例ニ從フ

第二篇　刑事裁判所ノ構成及ヒ權限

第一章　通則

第三十一條　通常刑事ノ裁判權ハ民事ノ裁判權ト同一ノ裁判所ニ屬ス

第三十二條　裁判所ノ位置及ヒ管轄ノ區劃ハ司法卿ノ奏請ニ

因リ上裁ヲ以テ之ヲ定ム

第三十三條　裁判所ニハ檢察官一名又ハ數名ヲ置ク

第三十四條　刑事ニ付キ檢察官ノ職務左ノ如シ

一　犯罪ヲ搜査ス

二　犯罪ニ付キ取調ノ處分及ヒ法律ノ適用ヲ裁判官ニ請求ス

三　裁判所ノ命令及ヒ言渡ノ執行ヲ指揮ス

四　裁判所ニ於テ公益ヲ保護ス

第三十五條　檢察官一名ハ公廷ニ立會フ可シ

第三十六條　裁判所ニハ書記一名又ハ數名ヲ置ク

第三十七條　書記ハ豫審及ヒ公判ニ立會ヒ調書公判始末書其他訴訟ニ關スル一切ノ書類ヲ作ル可シ

又裁判言渡書其他一切ノ書類ヲ保存ス可シ

第三十八條　犯罪ノ種類ニ因リ裁判管轄ヲ定ムルヿ左ノ如シ

一　違警罪ハ違警罪裁判所

二　輕罪ハ輕罪裁判所

三　重罪ハ重罪裁判所

重罪及ヒ輕罪又ハ輕罪及ヒ違警罪ニ付キ同時ニ同一ノ被告人ニ對シ訴アリタル時ハ附帶ノ犯罪ニ非スト雖モ上等ノ裁判所併セテ之ヲ管轄ス

第三十九條　左ノ場合ニ於テハ附帶ノ犯罪ナリトス

一　同一ノ場所ニ於テ同時ニ一人又ハ數人ニテ數罪ヲ犯シ

タル時

二　數人通謀シテ日時又ハ場所ヲ異ニシ數罪ヲ犯シタル時

三　自己又ハ他人ノ犯罪ヲ容易ニスル爲メ又ハ其罪ヲ免カルヽ爲メ他ノ罪ヲ犯シタル時

第四十條　同等ノ裁判所ニ於テハ犯罪ノ地ノ裁判所ヲ以テ豫審及ヒ公判ノ管轄ナリトス

犯罪ノ地分明ナラサル時ハ被告人逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第四十一條　數箇ノ裁判所ノ管轄地内ニ於テ同時ニ又ハ繼續シテ一箇ノ罪ヲ犯シタル時ハ其中ニテ被告人逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

數罪俱發ノ場合ニ於テモ亦同シ

第四十二條　犯罪ノ地ニ非サル裁判所ノ管轄地内ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ最近ノ管轄裁判所ニ送致ス可シ

令狀ヲ以テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ其令狀ヲ發シタル裁判所ニ送致ス可シ

第四十三條　數箇ノ裁判所ノ管轄ナル場合ニ於テ被告人ヲ逮捕スルヿ能ハス若クハ法律上逮捕スルヿヲ許サヽル時ハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ着手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第四十四條　從犯ハ正犯ヲ管轄スル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

數箇ノ裁判所ノ管轄ニ屬スル正犯數名アル時ハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ着手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

高等法院及ヒ陸海軍裁判所ノ管轄ニ付キ法律ニ於テ特ニ定メタル場合ハ本條ノ例ニ在ラス

第四十五條　外國ニ在テ犯シタル罪日本國ノ法律ニ依リ處斷ス可キ者ニシテ內地ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス又外國ヨリ送致シタル時ハ送致ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

兩席裁判ヲ爲ス可キ場合ニ於テハ被告人最終住所ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス其住所分明ナラサル時ハ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲ス可シ

第四十六條　商船內ノ犯罪ニ付テノ管轄及ヒ訴訟手續ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第四十七條　豫審ヲ爲シタル裁判官ハ其公判ニ干預ス可カラス前ニ豫審又ハ公判ヲ爲シタル裁判官ハ哀訴及ヒ兩席裁判ニ對スル故障ヲ除クノ外其上訴ノ裁判ニ干預ス可カラス此規則ニ背キタル時ハ其言渡ノ效ナカル可シ

第四十八條　裁判所ハ訴ヲ受ケタル事件ニ付キ自ラ其管轄ナリヤ否ヲ判決スルノ權アリ其判決ニ付テハ本案ノ事件終審ナル可キ場合ト雖モ通常ノ規則ニ從ヒ檢察官其他訴訟關係人ヨリ上訴スルヿヲ得

第二章　遠警罪裁判所

第四十九條　治安裁判所ハ違警罪裁判所トシテ其管轄地内ニ於テ犯シタル違警罪ヲ裁判ス

第五十條　違警罪裁判所判事ノ職務ハ治安裁判所判事之ヲ行フ

判事差支アルトキハ判事補其職務ヲ行フ

第五十一條　違警罪裁判所檢察官ノ職務ハ其裁判所々在ノ地ノ警部之ヲ行フ

第五十二條　違警罪裁判所檢察官ハ毎月未決既決ノ事件表ヲ作リ輕罪裁判所檢事ニ差出ス可シ

事件表ニハ違警罪裁判所判事認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第五十三條　違警罪裁判所書記ノ職務ハ治安裁判所書記之ヲ行フ

第三章　輕罪裁判所

第五十四條　始審裁判所ハ輕罪裁判所トシテ其管轄地内ニ於テ犯シタル輕罪ヲ裁判ス

又重罪及ヒ輕罪ノ豫審ヲ行フ

又其管轄地内ノ違警罪裁判所ノ始審ノ裁判ニ對スル控訴ヲ裁判ス

第五十五條　輕罪裁判所判事ノ職務ハ裁判所長ヨリ始審裁判所判事一名又ハ數名ニ順次滿一年間之ヲ命ス

又滿一年間更ニ其職務ヲ繼續セシムルヿヲ得

第五十六條　豫審判事ノ職務ハ司法卿ヨリ始審裁判所判事一名又ハ數名ニ滿一年間之ヲ命ス

又滿一年以上其職務ヲ繼續ス可キヿヲ命スルヲ得

第五十七條　判事差支アル時ハ其他ノ判事又ハ判事補其職務ヲ行フ

判事補ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒ意見ヲ述ルヿヲ得

第五十八條　輕罪裁判所檢察官ノ職務ハ始審裁判所檢事又ハ其指名シタル檢事補之ヲ行フ

第五十九條　輕罪裁判所書記ノ職務ハ始審裁判所書記之ヲ行フ

第六十條　東京警視本署長及ヒ府縣長官ハ各其管轄地内ニ於テ司法警察官トシテ犯罪ヲ搜査スルニ付キ檢事ト同一ノ權ヲ有ス但東京府長官ハ此限ニ在ラス

左ニ記載シタル官吏ハ檢事ノ補佐トシテ其指揮ヲ受ケ第三編ニ定メタル規則ニ從ヒ司法警察官トシテ犯罪ヲ搜査ス可シ

一　警視警部

二　區長郡長

三　治安判事

四　警部ノ在ラサル地ノ戶長

第六十一條　司法警察官檢察官又ハ裁判官ハ他ノ司法警察官檢察官又ハ裁判官ヨリ犯罪取調ノ爲メ其管轄地内ニ於テ證據其他事實參考ト爲ル可キ事物ヲ集取ス可キノ囑託ヲ受タ

ルコアル可シ

第六十二條　撿事ハ二月毎ニ讞審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ作リ控訴裁判所撿事長ニ差出ス可シ

又違警罪裁判所撿察官ヨリ差出シタル事件表ヲ同時ニ撿事長ニ差出シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

事件表ニハ裁判所長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第四章　控訴裁判所

第六十三條　控訴裁判所ニ刑事局ヲ設キ輕罪裁判所ノ始審ノ裁判ニ對スル控訴ヲ裁判ス但其裁判ハ判事三名以上ニテ之ヲ爲ス可シ

第六十四條　刑事局判事ノ職務ハ裁判所長ヨリ其裁判所判事數名ニ順次滿一年間之ヲ命ス

又滿一年間更ニ其職務ヲ繼續セシムルヿヲ得

第六十五條　刑事局判事差支アル時ハ裁判所長ヨリ民事局判事ヲシテ其職務ヲ行ハシム

裁判所長ハ何時ニテモ裁判長ト爲ルヿヲ得

第六十六條　刑事局撿察官ノ職務ハ其裁判所撿事長又ハ其指名シタル撿事之ヲ行フ

第六十七條　撿事長ハ其裁判所ノ管轄地内ニ於テ輕罪裁判所撿事ニ屬スル司法警察及ヒ起訴ノ職務ヲ行ヒ又ハ其所屬ノ撿事ヲシテ之ヲ行ハシムルヿヲ得

又起訴及ヒ其他ノ職務ニ付キ其管轄地内ノ撿察官ニ告達ス

ルコアル可シ

檢事長ハ其管轄地内ノ檢察官及ヒ司法警察官ヲ監督ス

第六十八條　檢事長ハ三月毎ニ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ作リ司法卿ニ差出ス可シ

又輕罪裁判所檢事ヨリ差出シタル事件表ヲ同時ニ司法卿ニ差出シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

事件表ニハ裁判所長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第六十九條　判事局書記ノ職務ハ其裁判所書記之ヲ行フ

第五章　重罪裁判所

第七十條　重罪裁判所ハ其管轄地内ニ於テ犯シタル重罪ヲ裁判ス

第七十一條　重罪裁判所ハ三月毎ニ之ヲ開ク

若シ事件夥多ナル時ハ控訴裁判所長及ヒ檢事長ヨリ司法卿ニ具申シ其許可ヲ得テ臨時開廳スルヿヲ得

第七十二條　重罪裁判所ハ控訴裁判所又ハ始審裁判所ニ於テ之ヲ開ク

第七十三條　重罪裁判所ハ左ノ職員ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ

一　裁判長一名但控訴裁判所長ヨリ其裁判所判事中ニテ之ヲ命ス

二　陪席判事四名但控訴裁判所ニ於テ開ク時ハ裁判所長ヨリ其裁判所判事中ニテ之ヲ命シ始審裁判所ニ於テ開ク時ハ其裁判所長及ヒ先任ノ判事ヲ以テ之ニ充ツ

第七十四條　重罪裁判所檢察官ノ職務ハ控訴裁判所檢事長又ハ其指名シタル檢事之ヲ行フ

始審裁判所ニ於テ開ク時ハ檢事長ヨリ始審裁判所檢事ヲシテ其職務ヲ行ハシムルヿヲ得

第七十五條　重罪裁判所書記ノ職務ハ開廳ス可キ裁判所ノ書記之ヲ行フ

第七十六條　控訴裁判所檢事長ハ開廳ノ後既決事件表ヲ作リ司法卿ニ差出ス可シ

事件表ニハ控訴裁判所長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第六章　大審院

第七十七條　大審院ニ刑事局ヲ置キ左ノ條件ヲ裁判ス

一　上告

二　再審ノ訴

三　裁判管轄ヲ定ムルノ訴

四　公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴

第七十八條　刑事局ニ於テハ判事五名以上ニ非サレハ裁判ヲ爲ス可カラス

第七十九條　刑事局判事ノ職務ハ司法卿ノ奏請ニ因リ其院判事ニ之ヲ命ス

判事差支アル時ハ民事局判事授任ノ順序ニ從ヒ其職務ヲ行フ

第八十條　刑事局檢察官ノ職務ハ其院檢事長又ハ其指名シタル檢事之ヲ行フ

第八十一條　刑事局書記ノ職務ハ其院書記之ヲ行フ

第八十二條　檢事長ハ三月毎ニ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ作リ司法卿ニ差出ス可シ

事件表ニハ院長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第七章　高等法院

第八十三條　高等法院ニ於テハ刑法第二編第一章第二章ニ記載シタル重罪ヲ裁判ス

又皇族ノ犯シタル重罪及ヒ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ヲ裁判ス

又勅任官ノ犯シタル重罪ヲ裁判ス

前二項ニ記載シタル者ノ正犯及ヒ從犯ハ身分ノ如何ヲ問ハス其院ニ於テ之ヲ裁判ス

第八十四條　高等法院ハ司法卿ノ奏請ニ因リ上裁ヲ以テ之ヲ開ク其裁判ス可キ事件及ヒ開院ス可キ場所モ亦上裁ヲ以テ之ヲ定ム

第八十五條　高等法院ハ左ノ職員ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ

一　裁判長一名陪席裁判官六名但元老院議官大審院判事中ヨリ毎年豫メ上裁ヲ以テ之ヲ命ス

二　豫備裁判官二名但前項ノ式ニ從ヒ之ヲ命ス

第八十六條　豫審判事ノ職務ハ上裁ヲ以テ大審院刑事局判事

一名又ハ數名ニ之ヲ命ス

第八十七條　高等法院檢察官ノ職務ハ大審院檢事長又ハ司法卿ヨリ指名シタル檢事之ヲ行フ

第八十八條　高等法院書記ノ職務ハ大審院書記之ヲ行フ

第八十九條　高等法院ノ裁判ニ對シテハ上訴ヲ許サス但左ノ條件ニ於テハ其院ニ上訴スルヿヲ得

一　闕席裁判アリタル場合ニ於テ故障

二　第四百三十六條ト同一ノ場合ニ於テ哀訴

三　第四百三十九條ト同一ノ場合ニ於テ再審ノ訴

第九十條　被告事件夥多ナル時又ハ再審ノ訴ヲ裁判ス可キ時ハ新ニ職員ヲ命スルヿアル可シ

第九十一條　高等法院ノ訴訟手續ハ通常ノ規則ニ從フ

第三編　犯罪ノ搜査起訴及ヒ豫審

第一章　搜査

第九十二條　檢察官ハ後ニ記載シタル告訴告發現行犯其他ノ原由ニ因リ犯罪アルヿヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタル時ハ其證憑及ヒ犯人ヲ搜査シ第百七條以下ノ規則ニ從ヒ起訴ノ手續ヲ爲ス可シ

第一節　告訴及ヒ告發

第九十三條　何人ニ限ラス重罪輕罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ犯罪ノ地若クハ被告人所在ノ地ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ告訴スルヿヲ得

檢察判事告訴ヲ受ケタル時ハ第百十四條以下ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ

掖事告訴ヲ受ケタル時ハ第百七條ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ

司法警察官告訴ヲ受ケタル時ハ速ニ其書類ヲ掖事ニ送致ス可シ

違警罪ニ付テハ犯罪ノ地ノ違警罪裁判所掖察官又ハ司法警察官ニ告訴スルヿヲ得其告訴ヲ受ケタル司法警察官ハ之ヲ違警罪裁判所掖察官ニ移ス可シ

第九十四條　告訴人ハ成ル可ク其證憑及ヒ事實參考ト爲ル可キヿヲ申立ツ可シ

又告訴人ハ第百十條以下ノ規則ニ從ヒ民事原告人ト爲ルヿヲ得

第九十五條　告訴ハ告訴人ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲ス可シ

又告訴ハ口述ヲ以テ之ヲ爲スヿヲ得其告訴ヲ受ケタル官吏ハ調書ヲ作リ告訴人ニ之ヲ讀聞カセ共ニ署名捺印ス可シ若シ告訴人署名捺印スルヿ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

告訴人ニハ告訴ヲ受ケタルノ證書ヲ渡ス可シ

第九十六條　官吏其職務ヲ行フニ因リ重罪輕罪アルヿヲ認知シ又ハ重罪輕罪アリト思料シタル時ハ速ニ其職務ヲ行フ地ノ掖事ニ告發ス可シ

告發ハ官吏ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲シ成ル可ク
證憑及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ添フ可シ
違警罪ニ付テハ違警罪裁判所檢察官ニ告發ス可シ

第九十七條　何人ニ限ラス重罪輕罪アルヿヲ認知シ又ハ重罪輕罪アリト思料シタル時ハ第九十四條第九十五條ノ規則ニ從ヒ其所在ノ地若クハ犯罪ノ地ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ告發スルヿヲ得

告發ヲ受クタル官吏ハ第九十三條ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ

第九十八條　告訴告發ハ代人ニ委任シテ之ヲ爲スヿヲ得但第九十六條ノ場合ハ此限ニ在ラス

無能力者ノ告訴ハ法律ニ定メタル代人之ヲ爲スモ其效アリトス

第九十九條　告訴告發ハ其願下ヲ爲シ又ハ其申立ヲ變更スルヿヲ得此場合ト雖モ第十六條ノ規則ニ從ヒ被告人ヨリ要償ノ訴ヲ受クルヿアル可シ

第二節　現行犯罪

第百條　現行犯罪トハ現ニ行ヒ又ハ現ニ行ヒ終リタル際ニ發覺シタル罪ヲ謂フ

第百一條　重罪輕罪ニ付キ左ノ場合ハ現行犯ニ准ス

一　犯人トシテ一人又ハ數人ニ追呼セラルヽ時

二　兇器贓物其他犯人ト思料ス可キ物件ヲ携帶シタル時

三　家宅内ニ於テ犯シタル罪ヲ檢證スル爲メ又ハ其犯人ト思料ス可キ者ヲ逮捕スル爲メ戸主ヨリ官吏ニ其處分ヲ求メタル時

第百二條　司法警察官及ヒ巡査其職務ヲ行フニ當リ重罪輕罪ノ現行犯アルヿヲ知リタル時ハ令狀又ハ命令ヲ待タスシテ被告人ヲ逮捕ス可シ

違警罪ノ現行犯アルヿヲ知リタル時ハ被告人ノ氏名住所ヲ問ヒ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ告發ス可シ其氏名住所分明ナラス又ハ逃亡ノ恐アル者ハ違警罪裁判所ニ引致スルヿヲ得

第百三條　巡査被告人ヲ逮捕シタル時ハ速ニ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ

其被告人ヲ受取リタル司法警察官ハ逮捕及ヒ告發ニ付テノ調書ヲ作ル可シ

第百四條　司法警察官被告人ヲ逮捕シ又ハ之ヲ受取リタル時ハ假ニ被告人ノ訊問及ヒ檢證處分ヲ爲ス可シ

第百五條　何人ニ限ラス重罪輕罪ノ現行犯アル場合ニ於テハ直チニ被告人ヲ逮捕スルヿヲ得

第百六條　前條ノ場合ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル者ハ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ若シ引致スルヿヲ得サル時ハ自己ノ氏名職業住所及ヒ其逮捕ノ事由ヲ陳述シ假ニ之ヲ巡査ニ引渡スヿヲ得

被告人ヲ巡査ニ引渡シタル時ハ速ニ告訴又ハ告發ヲ爲ス可シ

被告人又ハ巡査ハ逃捕ヲ爲シタル者ニ對シ共ニ官署ニ至ルヿヲ求ムルヲ得但逃捕ヲ爲シタル者ハ正當ノ事由アルニ非サレハ其求ヲ拒ムヿヲ得ス

第二章　起訴

第一節　檢察官ノ起訴

第百七條　檢事犯罪ノ搜査ヲ終リタル時ハ左ノ手續ヲ爲ス可シ

一　重罪ト思料シタル事件ニ付テハ豫審判事ニ豫審ヲ求ム可シ

二　輕罪ト思料シタル事件ニ付テハ其輕重難易ニ從ヒ豫審ヲ求メ又ハ直チニ輕罪裁判所ニ其訴ヲ爲ス可シ

三　違警罪ト思料シタル事件ニ付テハ證據書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ送致ス可シ

四　被告人ノ身分犯罪ノ種類又ハ場所ニ因リ其管轄ニ屬セサル者ト思料シタル事件ニ付テハ之ヲ管轄裁判所檢察官ニ送致ス可シ

被告事件罪ト爲ラス又ハ公訴受理ス可カラサル者ト思料シタル時ハ起訴ノ手續ヲ爲ス可カラス

第百八條　前條ノ場合ニ於テ被告事件告訴ニ係ル時ハ檢事ヨリ其處分ヲ被害者ニ通知ス可シ

第百九條　檢事豫審ヲ求ムル時ハ證據及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ送致シ且臨檢ス可キ場所逮捕ス可キ人名及ヒ原被ノ證人ト爲ル可キ者ヲ指示ス可シ

第二節　民事原告人ノ起訴

第百十條　重罪輕罪ノ被害者公訴ニ附帶シテ私訴ヲ爲サントスル時ハ告訴ト共ニ之ヲ申立テ又ハ告訴ヲ爲シタル後其旨ヲ豫審判事ニ申立ツ可シ

豫審判事直チニ被害者ヨリ民事原告人ト爲ル可キノ申立ヲ受ケタル時ハ檢察官ノ起訴ナシト雖モ公訴私訴ヲ併セテ受理シタル者トス

豫審判事ハ何レノ場合ニ於テモ直チニ被害者ヨリ民事原告人ト爲ル可キノ申立ヲ受クタル時ハ其旨ヲ檢事ニ通知ス可シ

第百十一條　被害者ハ公訴ノ本案ニ付キ始審終審ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ私訴ヲ爲シ若クハ其要ムル所ヲ變更スルヿヲ得

又私訴ノ願下ヲ爲シタル後更ニ其申立ヲ爲シ若クハ其要ムル所ヲ變更スルヿヲ得

第百十二條　被害者ハ代人ニ委任シテ私訴ヲ爲シ又ハ其願下若クハ棄權ヲ爲スヿヲ得

被害者無能力ナル時ハ法律ニ定メタル代人之ヲ爲ス可シ

第三章　豫審

第百十三條　現行ノ重罪輕罪ヲ除クノ外豫審判事ハ前章ニ定メタル規則ニ從ヒ檢事又ハ民事原告人ノ請求アルニ非サレハ豫審ニ取掛ルヿヲ得ス此規則ニ背キタル時ハ其請求ヨリ以前ニ係ル手續ノ效ナカル可シ

第百十四條　豫審判事ハ重罪輕罪ニ付キ直チニ告訴又ハ告發ヲ受ケタル時ハ召喚狀ヲ以テ被告人ヲ呼出シ之ヲ訊問スルヿヲ得若シ引續キ取調ヲ爲ス可キ者ト思料シタル時ハ其事件ヲ檢事ニ送致ス可シ

第百十五條　豫審判事ハ告訴告發ノ事件急速ヲ要スル時ハ直チニ被告人ニ對シ勾引狀ヲ發シ又ハ訊問シタル後勾留狀ヲ發スルヿヲ得此場合ニ於テハ速ニ其旨ヲ檢事ニ通知シ且證憑及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ送致ス可シ

若シ其通知ヲ爲シタルヨリ一日內ニ檢事起訴ヲ爲サヽル時ハ速ニ被告人ヲ放免ス可シ但後日起訴ヲ爲スノ妨礙ト爲ルヿナカル可シ

第百十六條　被告人所在ノ地ノ豫審判事直チニ告訴告發ヲ受ケタル又ハ檢事ヨリ其送致ヲ受ケ被告事件急速ヲ要スル時ハ通常ノ規則ニ從ヒ被告人ノ訊問又ハ檢證處分ヲ爲シタル後證憑及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ犯罪ノ地ノ豫審判事ニ送致ス可シ

若シ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ勾留狀ヲ以テ被告人ヲ送致スルヿヲ得

第百十七條　檢事ハ豫審中何時ニテモ豫審判事ニ請求シテ訴訟書類ヲ檢閲スルヿヲ得但二十四時内ニ之ヲ還付ス可シ又必要ナリトスル處分ニ付キ臨時其請求ヲ爲スヿヲ得

第一節　令狀

第百十八條　豫審判事ハ檢事又ハ民事原告人ノ起訴ニ因リ重罪輕罪ノ事件ヲ受理シタル時ハ被告人ニ對シ先ツ召喚狀ヲ發ス可シ但召喚狀ノ送達ト被告人出廷トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アル可シ

召喚狀ニ因リ出廷シタル被告人ハ即時ニ之ヲ訊問ス可シ又遇クトモ出廷ノ日ヲ過クルヿヲ得ス

第百十九條　豫審判事ハ召喚狀ヲ受ク可キ被告人其管轄地内ニ住セサル時ハ訊問ス可キ條件ヲ明示シテ被告人所在ノ地ノ豫審判事ニ其處分ヲ囑託スルヿヲ得

第百二十條　豫審判事ハ召喚狀ヲ受ケタル被告人其日時ニ出廷セサル時ハ勾引狀ヲ發スルヿヲ得

第百二十一條　豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ直チニ勾引狀ヲ發スルヿヲ得

一　被告人定リタル住所アラサル時

二　被告人罪證ヲ湮滅シ又ハ逃亡スルノ恐アル時

三　被告人未遂罪又ハ脅迫罪ヲ犯シ仍ホ其目的ヲ遂クントスルノ恐アル時

第百二十二條　勾引狀執行ノ命ヲ受ケタル者ハ其令狀ヲ發シ

タル豫審判事ニ被告人ヲ引致ス可シ

勾引狀ヲ以テ引致シタル被告人ハ四十八時内ニ之ヲ訊問ス可シ若シ其時間ヲ經過スル時ハ勾留狀ヲ發スルニ非サレハ當然之ヲ釋放ス可シ

第百二十三條　勾引狀ヲ發シタル前被告人既ニ豫審判事ノ管轄地外ニ在ル時ハ被告人ヨリ其所在ノ地ノ豫審判事ノ取調ヲ求ムルヿヲ得其求ヲ受ケタル豫審判事ハ假ニ被告人ヲ勾留シ速ニ勾引狀ヲ發シタル豫審判事ニ其旨ヲ通知ス可シ

第百二十四條　前條ノ場合ニ於テ勾引狀ヲ發シタル豫審判事ハ被告人ヲ勾留シタル豫審判事ニ訊問ノ條件ヲ明示シテ其處分ヲ囑託シ又ハ前ニ發シタル勾引狀ヲ以テ被告人ヲ送致ス可キヿヲ請求ス可シ

其囑託ヲ受ケタル豫審判事ハ被告人ヲ訊問シタル後其旨ヲ勾引狀ヲ發シタル豫審判事ニ通知シ其意見ヲ聽キ被告人ヲ放免シ又ハ前ニ發シタル勾引狀ヲ以テ管轄豫審判事ニ送致ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ

第百二十五條　豫審判事ハ召喚狀又ハ勾引狀ヲ受ケタル被告人疾病其他正當ノ事由アリテ令狀ニ應スル能ハサルヿヲ證明シタル時ハ被告人ノ所在ニ就テ之ヲ訊問スルヿヲ得若シ被告人其管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ豫審判事ニ訊問ノ事ヲ囑託ス可シ

第百二十六條　勾留狀ハ被告人逃亡シ又ハ第百二十三條ノ場

合ヲ除クノ外被告人ヲ訊問シタル後禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料スルニ非サレハ之ヲ發スルヿヲ得ス

第百二十七條　豫審判事ハ勾留狀ヲ執行シタルヨリ十日ヲ過クル時ハ之ヲ收監狀ニ換ヘ若クハ第二百十九條ノ規則ニ從ヒ被告人ヲ責付ス可シ

檢事ハ被告人ヲ責付スルヿナク更ニ十日間之ヲ勾留ス可キヿヲ豫審判事ニ求ムルヲ得

第百二十八條　收監狀ハ既ニ取掛リタル豫審ノ手續ヲ檢事ニ通知シ且其意見ヲ聽キタル後ニ非サレハ之ヲ發スルヿヲ得ス

第百二十九條　收監狀ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

一　被告事件ノ概畧及ヒ加重減輕ノ模樣アル時ハ其概畧

二　其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條

三　檢察官ノ意見ヲ聽キタルヿ

第百三十條　總テ令狀ニハ被告事件及ヒ被告人ノ氏名職業住所ヲ記載ス可シ但召喚狀ヲ除クノ外其氏名分明ナラサル時ハ容貌體格等ヲ明示ス可シ

又令狀ニハ之ヲ發スルノ年月日時ヲ記載シ豫審判事及ヒ書記署名捺印ス可シ

勾引狀勾留狀收監狀ハ巡査ヲシテ之ヲ執行セシム

第百三十一條　召喚狀ハ第二十三條ノ規則ニ從ヒ書記局所屬ノ使丁ヲシテ被告人又ハ其住所ニ之ヲ送達セシム

第百三十二條　勾引狀勾留狀收監狀ハ日本全國ニ於テ之ヲ執行ス但時宜ニ因リ正本數通ヲ作リ巡査數人ニ分付スルヿアル可シ

前項ノ令狀ヲ執行スルニハ被告人ニ正本ヲ示シ其謄本ヲ下付ス可シ此場合ニ於テハ第二十三條第二項第四項ノ規則ニ從フ

第百三十三條　令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡査ハ被告人其家宅若クハ他人ノ家宅ニ潛匿シタリト思料シタル時ハ其地ノ戶長又其差支アル時ハ隣佑二名以上ノ立會ヲ求メ之ヲ搜索ス可シ

巡査ハ被告人ヲ發見シタルト否トニ拘ハラス搜索調書ヲ作リ立會人ト共ニ署名捺印ス可シ

家宅搜索ハ日出前日沒後之ヲ爲スヿヲ得ス

第百三十四條　豫審判事ハ被告人他ノ管轄地內ニ潛匿シタルヿヲ知リ又ハ潛匿シタリト思料シタル場合ニ於テ被告事件急速ヲ要スル時ハ巡査ニ令狀ヲ帶行セシムルヿヲ得

巡査ハ被告人所在ノ地ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ令狀ヲ示シテ即時ニ執行ヲ求ム可シ

第百三十五條　豫審判事ハ被告人所在ノ地ヲ覺知スルヿ能ハサル時ハ各控訴裁判所檢事長ニ被告人ノ人相書ヲ送致シ搜査及ヒ逮捕ヲ爲ス可キヿヲ請求スルヿヲ得

請求ヲ受ケタル檢事長ハ其管轄地內ノ檢事ヲシテ搜査及ヒ

逮捕ノ處分ヲ爲サシムル可シ

第百三十六條　陸海軍在營ノ軍人軍屬ニ對シ令狀ヲ發シタル時ハ所屬長官ニ令狀ヲ示ス可シ長官ハ已ムヿヲ得サル差支アルニ非サレハ本人ヲシテ速ニ令狀ニ應セシム可シ其行軍ノ際亦同シ

第百三十七條　勾留狀又ハ收監狀ヲ受ケタル被告人ハ速ニ其令狀ニ記載シタル監倉ニ引致ス可シ若シ其監倉ニ引致スルヿ能ハサル時ハ假ニ最近ノ監倉ニ引致スルヿヲ得何レノ場合ニ於テモ監倉長ハ令狀ヲ檢閱シテ被告人ヲ受取リ其證書ヲ渡ス可シ

第百三十八條　令狀執行ノ命ヲ受クタル巡査ハ之ヲ執行シタルヿ又執行スルヿ能ハサル時ハ其事由ヲ令狀ノ正本ニ記載ス可シ

巡査ハ令狀執行ニ關スル書類ヲ書記局ニ差出シ書記ハ其受取證書ヲ渡ス可シ

第百三十九條　勾留狀又ハ收監狀ヲ受ク可キ被告人既ニ監倉若クハ獄舍ニ在ル時ハ書記ヨリ之ヲ本人ニ送達シ其旨ヲ正本及ヒ謄本ニ記載ス可シ

第百四十條　密室監禁ノ場合ヲ除クノ外被告人ハ監獄則ニ從ヒ官吏ノ立會ニ依リ其親屬故舊又ハ代言人ニ接見スルヿヲ得

書翰書籍其他ノ書類ハ豫審判事ノ檢閲ヲ經タル後ニ非サレ

ハ被告人ト外人トノ之ヲ授受スルヿヲ許サス但豫審判事ハ其書類ヲ留置クヿヲ得

第百四十一條　豫審判事ハ被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ニ非スト思料シタル時ハ豫審中何時ニテモ勾留狀又ハ收監狀ヲ取消ス可シ但收監狀ヲ取消ス時ハ豫メ檢察官ノ意見ヲ聽ク可シ

第百四十二條　監倉ニハ刑法治罪法ヲ備置キ被告人ノ請求ニ從ヒ之ヲ貸與ス可シ

第二節　密室監禁

第百四十三條　豫審判事ハ豫審中事實發見ノ爲メ必要ナリト思料シタル時ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ勾留狀若クハ收監狀ヲ受クタル被告人ヲ密室ニ監禁スルノ言渡ヲ爲スヿヲ得

第百四十四條　密室監禁ノ言渡ヲ受クタル被告人ハ一名毎ニ之ヲ別室ニ置キ豫審判事ノ允許ヲ得ルニ非サレハ他人ト接見シ又ハ書類貨幣其他ノ物品ヲ授受スルヿヲ許サス

食物飲料藥餌其他監倉ヨリ給ス可キ物品ト雖モ監倉長ノ特ニ指名シタル者ヲシテ之ヲ給與セシム

第百四十五條　密室監禁ハ十日ヲ超過ス可カラス但十日毎ニ其言渡ヲ更改スルヿヲ得

言渡ヲ更改スル時ハ其事由ヲ裁判所長ニ報告ス可シ

豫審判事ハ十日間ニ少クトモ二度被告人ヲ訊問シ通常ノ規

則ニ從ヒ調書ヲ作ル可シ

第三節　證據

第百四十六條　法律ニ於テハ被告事件ノ模樣ニ因リ有罪ナルノ推測ヲ定ムルヿナシ

被告人ノ白狀官吏ノ檢證調書證據物件證人ノ陳述鑑定人ノ申立其他諸般ノ徵憑ハ裁判官ノ判定ニ任ス

第百四十七條　豫審判事ハ檢察官民事原告人被告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル證據徵憑ヲ集取ス可シ

第百四十八條　豫審判事臨檢家宅捜索物件差押又ハ被告人證人ノ訊問ヲ爲スニハ書記ノ立會ヲ必要トス書記ハ調書ヲ作リ豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ

裁判所外ニ於テ急遽ノ際書記ノ立會ヲ得ルヿ能ハサル時ハ立會人二名アルヲ要ス但監倉ニ就テ被告人ヲ訊問スル時ハ其監倉ノ官吏一名ヲシテ立會ハシム可シ

前項ノ場合ニ於テハ豫審判事自ラ調書ヲ作リ之ヲ讀聞カセ立會人ト共ニ署名捺印ス可シ

書記又ハ立會人ナクシテ爲シタル處分ハ其效ナカル可シ

第四節　被告人ノ訊問及ヒ對質

第百四十九條　豫審判事ハ先ツ被告人ヲ訊問ス可シ但檢證ヲ爲シ又ハ證人ヲ訊問スルニ付キ急速ヲ要スル時ハ此限ニ在ラス

第百五十條　豫審判事ハ被告人ヲシテ其罪ヲ白狀セシムル爲メ恐嚇又ハ詐言ヲ用フ可カラス

第百五十一條　書記ハ訊問及ヒ陳述ヲ錄取シ被告人ニ之ヲ讀聞カス可シ

豫審判事ハ被告人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヲ問ヒ署名捺印セシム可シ若シ署名捺印スルヿ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

書記ハ本條ノ式ヲ履行シタルヿヲ記載シ豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ

第百五十二條　被告人其陳述ニ付キ變更增減ス可キヿヲ申立ヘル時ハ更ニ訊問ヲ爲シ前條ノ規則ニ從ヒ其訊問及ヒ陳述ヲ錄取シ之ヲ讀聞カセ署名捺印ス可シ

第百五十三條　被告人ハ陳述書ノ謄本ヲ求ムルヿヲ得

第百五十四條　豫審判事ハ被告人ノ共犯ナルヿ人違ナキヿ其他事實ヲ發見ス可キ一切ノ模樣ヲ證スル爲メ必要ナリトスル時ハ被告人ト他ノ被告人證人又ハ其他ノ者ト對質セシムルヿヲ得

第百五十五條　書記ハ對質人ノ陳述及ヒ對質ニ因リ生スル一切ノ事件ヲ錄取シ對質人ニ其對質ニ關スル部分ヲ讀聞カス可シ

第百五十一條第百五十二條ノ規則ハ對質ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第百五十六條　被告人又ハ對質人聾ナル時ハ書面ヲ以テ問ヒ啞ナル時ハ書面ヲ以テ答ヘシム若シ聾者啞者文字ヲ知ラサル時ハ通事ヲ命ス可シ

被告人又ハ對質人國語ニ通セサル時亦同シ

第百五十七條　通事ハ正實ニ通譯ス可キノ宣誓ヲ爲ス可シ

書記ハ通事ニ調書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム可シ

第百九十二條第百九十三條第二百條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第五節　檢證及ヒ物件差押

第百五十八條　豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ重罪輕罪ノ犯所ニ臨ミ檢證ヲ爲ス可シ

又檢事ノ請求アリタル時ハ如何ナル場合ト雖モ臨檢ス可シ

第百五十九條　豫審判事ハ犯罪ノ性質方法日時場所及ヒ被告人ノ人違ナキヿヲ證明ス可キ模樣ニ付キ調書ヲ作ル可シ

又被告人ノ利益ト爲ル可キ模樣ヲモ記載ス可シ

第百六十條　豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ發見シタル物件其出所及ヒ模樣ニ因リ被告人ノ人違ナキヿ又ハ犯罪ノ模樣ヲ知ルニ足ル可シト思料シタル時ハ之ヲ差押ヘテ認印ヲ爲シ目錄ヲ作ル可シ但其物件ヲ監護シ又ハ遞送スルハ書記之ヲ擔任ス可シ

第百六十一條　豫審判事ハ臨檢家宅捜索物件差押ニ付キ其日ニ處分ヲ終ラサル時ハ場所ノ周圍ヲ閉鎖シ又ハ看守者ヲ置

ケフヲ得

第百六十二條　豫審判事ハ被告人ノ住所又ハ事實ヲ證明スル可キ物件ヲ藏匿スルノ疑アル者ノ住所ニ臨檢スルヿヲ得

被告人又ハ物件ヲ藏匿スル者其住所ニ在ラサル時ハ同居ノ親屬若シ其在ラサル時ハ戶長ノ立會アルヲ要ス

第百三十三條第三項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第百六十三條　被告人ハ臨檢家宅搜索ノ處分ニ立會ヒ又ハ代人ヲシテ立會ハシムルヿヲ得

若シ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ自ラ立會フヿヲ得ス但豫審判事本人ノ立會ヲ必要ナリトスル時ハ此限ニ在ラス

民事原告人及ヒ其代人ハ前ニ記載シタル處分ニ立會フヿヲ得但豫審判事ハ其立會ノ爲メ豫審ヲ遲延ス可カラス

第百六十四條　家宅搜索ノ場合ニ於テ豫審判事ハ第百六十條ノ規則ニ從ヒ物件ヲ差押フ可シ

物件ヲ差押ヘタル時ハ其目錄ノ謄本ヲ立會人ニ渡ス可シ

第百六十五條　豫審判事ハ被告人物件差押ノ處分ニ立會ヒタルト否トヲ問ハス其物件ヲ被告人ニ示シ辯解ヲ爲サシム可シ

其訊問及ヒ陳述ハ之ヲ調書ニ記載ス可シ

第百六十六條　豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ證人ノ陳述ヲ聽クヿヲ必要ナリトスル時ハ書記ノ立會ニ依リ各別ニ之ヲ訊問ス可シ

第百七十條以下ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第百六十七條　豫審判事ハ前數條ニ記載シタル處分中何人ニ限ラス允許ヲ得スシテ其場所ニ出入スルヿヲ禁スルヿヲ得若シ其禁ヲ犯ス者アル時ハ之ヲ逐斥シ又ハ處分ヲ終ルマテ之ヲ留置スルヿヲ得

第百六十八條　豫審判事ハ其管轄地内ト雖モ時宜ニ因リ臨檢家宅捜索ノ事ヲ其地ノ治安判事ニ囑託スルヿヲ得

第百六十九條　豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ驛遞電信鐵道ノ官署諸會社ニ其事由ヲ通知シ被告人又ハ豫審ニ關係アル者ヨリ發シ若クハ是等ノ者ニ對シ發シタル書類電報又ハ物件ヲ受取開披スルヿヲ得但受取證書ヲ渡ス可シ

前項ノ書類物件不用ニ屬シタル時ハ其官署又ハ會社ニ還付ス可シ

第六節　證人訊問

第百七十條　豫審判事ハ檢事民事原告人又ハ被告人ヨリ證人トシテ指名シタル者ヲ呼出ス可シ

原告證人被告證人ノ員數夥多ナル時ハ指名ノ順序ニ從ヒ又ハ最モ事實ヲ知ル可シト思料シタル者輕罪事件ニ付テハ各五名重罪事件ニ付テハ各十名ヲ限リ先ツ之ヲ呼出ス可シ但事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ此限ニ在ラス

又原被ノ指名セサル者ト雖モ豫審判事ノ職權ヲ以テ證人ト

シテ之ヲ呼出スヿヲ得

第百七十一條　證人ハ豫審判事ノ名ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ但其呼出狀ハ第二十三條ノ規則ニ從ヒ之ヲ送達ス可シ

若シ證人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ輕罪裁判所書記ニ送達ノ事ヲ囑託ス可シ

第百七十二條　豫審判事ハ證人裁判所々在ノ地ニ住セサル時ハ其住所ノ地ノ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルヿヲ得

若シ證人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ豫審判事又ハ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルヿヲ得

本條ノ場合ニ於テ呼出狀ハ囑託ヲ受ケタル判事ノ名ヲ以テ其裁判所ノ書記局ヨリ之ヲ送達ス可シ

第百七十三條　呼出狀ニハ證人ノ氏名住所及ヒ職業ヲ記載ス可シ

又出頭ノ日時場所及ヒ呼出ニ應セサル時ハ罰金ヲ言渡シ且勾引スルヿアル可キ旨ヲ記載ス可シ

呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アル可シ

第百七十四條　證人疾病公務其他正當ノ事故ニ因リ呼出ニ應スル能ハサルヿヲ證明シタル時ハ豫審判事其所在ニ就テ之ヲ訊問ス可シ

第百七十五條　證人ト爲ル可キ者陸海軍在營ノ軍人軍屬ナル時ハ其所屬長官ヲ經由シテ呼出狀ヲ送達ス其長官ハ即時ニ

出廷セシムヿヲ認可シ又ハ職務上已ムヿヲ得サル差支アル時ハ其事由ヲ付シテ出廷ノ延期ヲ豫審判事ニ請求ス可シ

第百七十六條　豫審判事ハ前二條ニ定メタル差支ノ場合ヲ除クノ外證人呼出ニ應セサル時ハ拽事ノ意見ヲ聽キ二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

豫審判事ハ其證人ニ對シ罰金ノ言渡書ト共ニ再度ノ呼出狀ヲ送達シ又ハ直チニ勾引狀ヲ發スルヿヲ得但其費用ハ證人ヲシテ之ヲ擔當セシム

若シ證人再度ノ呼出ニ應セサル時ハ二倍ノ罰金ヲ言渡シ且勾引狀ヲ發スルヿアル可シ

第百七十七條　豫審判事ハ證人初度又ハ再度ノ呼出狀ヲ受ケサルヿ其呼出狀第百七十三條ノ規則ニ背キタルヿ又ハ豫知シ難キ正當ノ事故アリテ出廷スル能ハサリシヿヲ證明シタル時ハ拽事ノ意見ヲ聽キ其罰金ノ言渡ヲ取消ス可シ

第百七十八條　證人呼出狀ニ因リ出廷シタル時ハ其呼出狀ヲ書記ニ差出ス可シ若シ之ヲ遺失シタル時ハ其人遠ナキヿヲ證明ス可シ

第百七十九條　豫審判事ハ證人トシテ呼出シタル者ニ對シ其氏名年齢職業住所及ヒ第百八十一條ニ記載シタル者ナリヤ否ヲ問フ可シ

第百八十條　豫審判事ハ證人ナシテ愛憎畏懼ノ心ナク正實ニ陳述ヲ爲ス可キヿヲ宣誓セシム可シ

豫審判事ハ證人ニ宣誓書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム若シ署名捺印スルヿ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

宣誓書ハ訴訟書類ニ添置ク可シ

第百八十一條　左ニ記載シタル者ハ證人ト爲ルヿヲ許サス但事實參考ノ爲メ其陳述ヲ聽クヿヲ得

一　民事原告人

二　民事原告人及ヒ被告人ノ親屬

三　民事原告人及ヒ被告人ノ後見人又ハ是等ノ者ノ後見ヲ受ケル者

四　民事原告人及ヒ被告人ノ雇人

第百八十二條　左ニ記載シタル者亦前條ニ同シ

一　十六歲未滿ノ幼者

二　知覺精神ノ不充分ナル者

三　瘖啞者

四　公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者

五　重罪事件ニ付キ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ受ケ又ハ重禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪事件ニ付キ公判ニ付セラレタル者

六　現ニ陳述ヲ爲ス可キ事件ニ付キ嘗テ訴ヲ受ケ其證憑充分ナラサルニ因リ免訴ノ言渡ヲ受ケタル者

第百八十三條　證人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ陳述ヲ肯セサル時ハ豫審判事擬事ノ意見ヲ聽キ刑法第百八十條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

醫師藥商穩婆又ハ代言人辯護人代書人公證人若クハ神官僧侶其身分職業ニ關スル秘密ノ事件ニ付キ委託ヲ受ケタル者ハ前項ノ例ニ在ラス

第百八十四條　證人ハ他ノ證人及ヒ被告人ト各別ニ之ヲ訊問ス可シ但事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ證人ト他ノ證人又ハ被告人ト對質セシムルヿヲ得

第百八十五條　豫審判事ハ證人ノ陳述ヲ確實ナラシムル爲メ必要ナリトスル時ハ重罪輕罪ノ犯所又ハ其他ノ場所ニ同行スルヿヲ得

若シ證人同行スルヿヲ肯セサル時ハ第百七十六條ノ規則ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ

第百八十六條　第百五十六條第百五十七條ノ規則ハ證人ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第百八十七條　皇族又ハ勅任官證人ナル時ハ豫審判事書記ト共ニ其所在ニ就テ陳述ヲ聽ク可シ

第百八十八條　書記ハ證人ノ陳述ニ付キ各別ニ調書ヲ作ル可シ

其調書ニハ證人宣誓ヲ爲シタルヿ又ハ爲サトルノ事由ヲ記

載ス可シ

第百八十九條　豫審判事ハ證人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヲ知ラシムル爲メ書記ヲシテ調書ヲ讀聞カセシム可シ

證人其陳述ヲ變更增減セントスルヲ請求スルヲ得書記ハ其請求アリタルヿ及ヒ變更增減ノ條件ヲ調書ニ記載シ豫審判事及ヒ證人ト共ニ署名捺印ス可シ若シ證人署名捺印スルヿ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

第百九十條　證人ハ即時ニ出廷ニ付テノ旅費日當ヲ要ムルヿヲ得

若シ日稼ヲ以テ生業トスル者ナル時ハ旅費日當ノ外日稼高ニ等シキ償金ヲ要ムルヿヲ得

本條ノ場合ニ於テハ豫審判事其金額ヲ定メ之ヲ言渡ス可シ

第七節　鑑定

第百九十一條　豫審判事ハ犯罪ノ性質方法及ヒ結果ヲ分明ナラシムル爲メ鑑定人ヲ必要ナリトスル時ハ學術職業ニ因リ鑑定スルヿヲ得可キ者一名又ハ數名ヲシテ鑑定ヲ爲サシム可シ

第百九十二條　鑑定人ハ書記局ヨリ呼出狀ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ其呼出狀ニハ犯罪事件ニ付キ鑑定ヲ命スルヿ及ヒ呼出ニ應セサル時ハ罰金ヲ言渡ス可キヿヲ記載ス可シ

鑑定人呼出ニ應セサル時ハ第百七十六條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ但勾引狀ヲ發スルヿヲ得ス

第百七十七條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第百九十三條　鑑定人ハ正實ニ鑑定ス可キノ宣誓ヲ爲ス可シ

其宣誓ハ第百八十條ノ式ニ從フ

書記ハ鑑定人ノ宣誓シタルヿヲ鑑定命令書ノ紙尾ニ記載シ

之ニ宣誓書ヲ添置ク可シ

第百九十四條　鑑定人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ鑑定ヲ肯セ

サル時ハ豫審判事撿事ノ意見ヲ聽キ刑法第百七十九條ニ從

ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許

サス

第百九十五條　第百八十一條第百八十二條ニ記載シタル者ニ

ハ鑑定ヲ命スルヿヲ得ス但急遽ノ際正當ノ鑑定人ト爲ル可

キ者ナキ時ハ事實參考ノ爲メ鑑定ヲ命スルヿヲ得

第百九十六條　豫審判事ハ成ル可ク鑑定ニ立會フ可シ

第百九十七條　豫審判事ハ鑑定人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以

テ鑑定人ヲ增加シ又ハ別人ヲシテ鑑定セシムルヿヲ得

第百九十八條　鑑定人ハ鑑定書ヲ作リ其手續結果及ヒ鑑定ヲ

爲シタル時間ヲ詳記ス可シ

若シ結果ヲ得サル時ハ其推測スル所ヲ記載ス可シ

鑑定人意見ヲ異ニスル時ハ各自鑑定書ヲ作リ又ハ各自ノ意

見ヲ一箇ノ鑑定書ニ記載ス可シ

第百九十九條　鑑定人ハ鑑定書ニ年月日ヲ記載シ署名捺印及

ヒ契印ス可シ

又鑑定書ニハ豫審判事之ヲ受取リタル年月日ヲ記載シ書記ト共ニ捺印ス可シ

鑑定書ハ鑑定命令書ニ添置ク可シ

外國人鑑定ヲ爲シタル時ハ其鑑定書ニ裁判所ヨリ命シタル通事ノ作リタル譯本ヲ添置ク可シ

第二百條　鑑定人及ヒ通事ニハ旅費給料其他相當ノ費用ヲ給與ス可シ

第八節　現行犯ノ豫審

第二百一條　豫審判事ハ捺事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルヿヲ知リタル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スル時ハ捺事ノ請求ヲ待タス直チニ其旨ヲ通知シ豫審ニ取掛ルヿヲ得

豫審判事ハ犯所ニ臨捺シ令狀ヲ發シ其他此章ニ定メタル規則ニ從ヒ豫審ノ處分ヲ爲スヿヲ得

第二百二條　前條ノ場合ニ於テハ捺事ノ起訴ナシト雖モ豫審判事捺證調書ヲ作ルヲ以テ公訴ヲ受理シタル者トス其調書ニハ現行ノ重罪又ハ輕罪ナルヿヲ記載ス可シ

豫審判事ハ速ニ書類ヲ捺事ニ送致ス可シ但捺事ヨリ其豫審手續ヲ繼續ス可キ者ニ非サルノ意見アリト雖モ通常ノ規則ニ從ヒ之ヲ終結ス可シ

第二百三條　捺事ハ豫審判事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルヿヲ知リタル時ハ豫審判事ヲ待ツヿナク其旨ヲ通知シテ犯所ニ臨捺シ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スヿヲ得但罰金ノ言渡

ヲ爲スヿヲ得ス

證人及ヒ鑑定人ノ陳述ハ宣誓ヲ用フルヿナク之ヲ聽クヿ可シ

第二百四條　前條ノ場合ニ於テ檢事ハ證憑書類ニ意見書ヲ添ヘ速ニ之ヲ豫審判事ニ送致ス可シ

第二百五條　第二百三條ニ於テ檢事ニ許シタル職務ハ司法警察官モ亦假ニ之ヲ行フヿヲ得但令狀ヲ發スルヿヲ得ス

司法警察官ハ證憑書類ニ意見書ヲ添ヘ被告人ト共ニ速ニ之ヲ檢事ニ送致ス可シ

第二百六條　檢事被告人ヲ受取リタル時ハ二十四時內ニ之ヲ訊問シ調書ヲ作リ勾留狀ヲ發スルト否トヲ問ハス一切ノ書類ニ請求書ヲ添ヘ豫審判事ニ送致ス可シ

若シ起訴ヲ爲ス可カラサル者ト認メタル時ハ直チニ被告人ヲ放免ス可シ

第二百七條　豫審判事ハ二十四時內ニ被告人ヲ訊問ス可シ此場合ニ於テハ檢事ノ發シタル勾留狀ヲ解キ又ハ之ヲ存スルヿヲ得

第二百八條　豫審判事ハ檢事又ハ司法警察官ノ爲シタル手續ニ付キ更ニ其取調ヲ爲スヿヲ得但檢事又ハ司法警察官ノ作リタル調書ハ之ヲ訴訟書類ニ添置ク可シ

第二百九條　檢事ハ輕罪ノ現行犯ニ係ル場合ニ於テ勾留狀ヲ發シタルト否トニ拘ハラス被告人ヲ訊問シタル後豫審ヲ求ムルニ及ハスト思料シタル時ハ直チニ輕罪裁判所ニ呼出ス

ヿヲ得

第九節　保釋

第二百十條　豫審判事ハ豫審中勾留狀又ハ收監狀ヲ受ケタル被告人ノ請求ニ因リ檢事ノ意見ヲ聽キ何時ニテモ呼出ニ應シ出延ス可キノ證書ヲ差出サシメ保釋ヲ許スヿヲ得

被告人無能力ナル時ハ親屬又ハ代人ヨリ保釋ヲ求ムルヿヲ得

第二百十一條　前條ノ證書ハ書記局ニ差出ス可シ

保釋中被告人ヲ呼出ス時ハ出延ヨリ二十四時前ニ其報知ヲ爲ス可シ

第二百十二條　保釋ヲ許スニハ金圓ヲ以テ被告人ノ出延ヲ保

證セシム可シ但豫審判事其金額ヲ定メ保釋ヲ許スノ言渡書ニ記載ス可シ

第二百十三條　保證ヲ爲スニハ被告人又ハ其他ノ者ヨリ保證金若クハ貯金預所又ハ銀行ノ預證書ヲ書記局ニ差出ス可シ

又裁判所ノ管轄地內ニ住シ且充分ナル資力アル者ヨリ金額ニ充ツ可キ保證書ヲ差出スヿヲ得

第二百十四條　保釋中被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出延セサル時ハ保證金ノ全部又ハ幾分ヲ沒入ス可シ

第二百十五條　保證金ヲ沒入スルニハ檢事ノ意見ヲ聽キ豫審判事其言渡ヲ爲ス可シ

若シ他人ノ保證ニ係ル時ハ民事ノ規則ニ從ヒ之ヲ徵收ス可シ

第二百十六條　豫審判事保證金ヲ沒入シタル時ハ保釋ノ言渡ヲ取消ス可シ

又豫審中保釋ノ言渡ヲ取消スヿヲ必要ナリトスル時ハ撿事ノ意見ヲ聽キ其言渡ヲ取消ス可シ

第二百十七條　豫審判事保證金ヲ沒入シタル後免訴ノ言渡違警罪裁判所ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタル時ハ撿事ノ意見ヲ聽キ前ニ沒入シタル金額ヲ還付ス可シ

第二百十八條　豫審判事免訴ノ言渡違警罪裁判所ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ若クハ保釋ノ言渡ヲ取消シタル時ハ保證金ヲ還付ス可シ

第二百十九條　豫審判事ハ保釋ノ請求アルト否トヲ問ハス撿事ノ意見ヲ聽キ被告人ヲ其親屬又ハ故舊ニ責付スルヿヲ得

第十節　豫審終結

第二百二十條　豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非ストシ又ハ他ニ取調ヲ要スルヿナシト思料シタル時ハ豫審終結ノ處分ニ付キ撿事ノ意見ヲ求ムル爲メ一切ノ訴訟書類ヲ送致ス可シ

撿事ハ訴訟書類ニ意見ヲ付シ三日內ニ之ヲ還付ス可シ

第二百二十一條　捜事ハ豫審充分ナラスト思料シタル時ハ其條件ニ付キ更ニ取調ヲ請求スルヿヲ得若シ豫審判事其請求ヲ肯セサル時ハ捜事訴訟書類ニ意見ヲ付シ二十四時内ニ之ヲ還付ス可シ

第二百二十二條　豫審判事ハ捜事ノ意見如何ナルヲ問ハス後ニ記載シタル言渡ヲ以テ豫審ヲ終結ス可シ

第二百二十三條　豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非サルヿヲ認メタル時ハ其旨ヲ言渡ス可シ若シ勾留ヲ要スル者ト認メタル時ハ前ニ發シタル令狀ヲ存シ又ハ新ニ令狀ヲ發シ其事件ヲ捜事ニ交付ス可シ

第二百二十四條　豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ免訴ノ言渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタル時ハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ

一　犯罪ノ證憑充分ナラサル時

二　被告事件罪ト爲ラサル時

三　公訴ノ期滿免除ト爲リタル時

四　確定裁判ヲ經タル時

五　大赦アリタル時

六　法律ニ於テ其罪ヲ全免スル時

本條ノ場合ニ於テ被害者ハ民事裁判所ニ非サレハ要償ノ訴ヲ爲スヿヲ得ス

第二百二十五條　被告事件違警罪ナリト思料シタル時ハ違警罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタル時ハ

釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百二十六條　被告事件輕罪ナリト思料シタル時ハ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ

被告人勾留ヲ受ケタル場合ニ於テ罰金ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

禁錮ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲スヿヲ得

若シ被告人未タ勾留ヲ受クサル時ハ令狀ヲ發スルヿヲ得

第二百二十七條　被告事件重罪ナリト思料シタル時ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ若シ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲シタル時ハ其言渡ヲ取消ス可シ

重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニハ控訴裁判所檢事長ノ指揮アルマテ豫審ヲ爲シタル裁判所ノ監倉ニ被告人ヲ留置ス可キヿヲ記載ス可シ

第二百二十八條　豫審終結ノ言渡ニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ付ス可シ

管轄ニ非サルノ言渡ヲ爲スニハ其原由ヲ明示シ若シ被告人ヲ勾留ス可キ時ハ其原由ヲ明示ス可シ

免訴ノ言渡ヲ爲スニハ被告事件罪ト爲ラサルヿ公訴受理ス可カラサルヿ及ヒ其原由又犯罪ノ證憑充分ナラサル時ハ其旨ヲ明示ス可シ

違警罪裁判所輕罪裁判所又ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲

スニハ犯罪ノ性質模樣證憑ノ充分ナルヿ及ヒ其罪ヲ罰スヿ可キ法律ノ正條ヲ明示ス可シ

第二百二十九條　前條ノ言渡書ニハ第百三十條ノ規則ニ從ヒ被告人ノ氏名等ヲ明示ス可シ

第二百三十條　書記ハ速ニ豫審終結ノ言渡書ノ謄本ヲ撿事民事原告人及ヒ被告人ニ送達ス可シ但是等ノ者ハ第二百四十六條以下ノ規則ニ從ヒ其言渡ニ對シ故障ヲ爲スヿヲ得

第二百三十一條　被告人ヲ逮捕スルヿ能ハサル場合ニ於テ重罪裁判所又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタル時ハ其旨ヲ言渡書ニ記載ス可シ但被告人ハ現ニ勾留ヲ受クルニ非サレハ其言渡ニ對シ上訴ヲ爲スヿヲ得ス

第二百三十二條　前條ノ場合ニ於テ撿事又ハ民事原告人ハ假ニ被告人ノ財産ヲ差押フ可キヿヲ民事裁判所ニ請求スルヿヲ得

第二百三十三條　豫審終結ノ言渡ヲ爲シタル時ハ豫審判事ヨリ速ニ其旨ヲ裁判所長ニ報告ス可シ

又十五日毎ニ未決ノ豫審事件ニ付キ簡畧ナル報告書ヲ差出ス可シ

第四章　豫審上訴

第二百三十四條　左ノ場合ニ於テハ撿事又ハ被告人ヨリ豫審終結ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲スヿヲ得

一　管轄違ノ申立ヲ棄却シタル時
二　法律ニ背キ令狀ヲ發シ又ハ之ヲ發セサル時
三　法律ニ背キ保釋責付ヲ爲シ又ハ之ヲ爲サヽル時
四　越權ノ處分アル時
民事原告人ハ私訴ニ付キ第四ノ場合ニ於テ故障ヲ爲スヿヲ得

第二百三十五條　故障ヲ爲サントスル者ハ其裁判所ノ書記局ニ趣意書ヲ差出ス可シ
故障アリタル時ハ書記其趣意書ノ謄本ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日内ニ答辯書ヲ差出スヿヲ得
故障ニ付テハ豫審處分ノ執行ヲ停止セス但保釋責付ヲ爲シタルニ付キ檢事ヨリ故障アリタル時ハ其執行ヲ停止ス

第二百三十六條　故障ハ其裁判所ノ會議局ニ於テ判事三名以上ニテ趣意書答辯書其他訴訟書類及ヒ檢事ノ意見書ニ依リ之ヲ判決ス可シ
會議局ノ言渡ハ速ニ之ヲ執行ス但其言渡ニ對シテハ豫審終結ノ言渡アリタル後上告ヲ爲スヿヲ得

第二百三十七條　左ノ場合ニ於テハ檢事被告人又ハ民事原告人ヨリ豫審終結ニ至ルマテ豫審判事ヲ忌避スルヿヲ得
一　豫審判事又ハ其配偶者ト被告人被害者又ハ是等ノ者ノ配偶者ト親屬ナル時
二　豫審判事被告人又ハ民事原告人ノ後見人ナル時

三　豫審判事又ハ其配偶者ニ於テ民事原告人被告人又ハ是等ノ者ノ親屬ヨリ賄賂ニ非スト雖モ贈物ヲ收受シ若クハ聽許シタル時

第二百三十八條　忌避ノ申立ハ豫審判事ニ之ヲ爲ス可シ但其申立ヲ爲スニハ趣意書二通ヲ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ趣意書ヲ豫審判事ニ送致シ豫審判事ハ其送致ヲ受クタルヨリ二十四時内ニ其申立ヲ認可シ又ハ棄却スルヿヲ趣意書ノ紙尾ニ記載シ一通ヲ書記局ニ藏置シ一通ヲ本人ニ送達ス可シ

第二百三十九條　豫審判事忌避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ其申立人ヨリ故障ヲ爲スヿヲ得

會議局ニ於テハ故障ノ趣意書及ヒ豫審判事ノ辯明書ニ依リ判決ヲ爲ス可シ

第二百四十條　豫審判事ハ忌避ノ申立アリタル時又ハ其申立ヲ棄却シタルニ付キ故障アリタル時ト雖モ豫審ノ手續ヲ繼續ス可シ但終結ノ言渡ヲ爲スヿヲ得ス

又急速ヲ要セサル事件ニ付テハ豫審ノ手續ヲ停止スルヿヲ得

第二百四十一條　會議局ニ於テ忌避ニ付テノ故障ヲ棄却シタル時ハ上告ヲ爲スヿヲ得但豫審終結ノ言渡アリタル後ニ非サレハ之ヲ爲スヿヲ得ス

第二百四十二條　豫審判事自ラ第二百三十七條ニ定メタル原

由アルヿヲ認メ又ハ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ會議局ニ回避ノ申立ヲ爲ス可シ

回避ノ申立ハ會議局ニ於テ之ヲ判決ス可シ

第二百四十三條　會議局ニ於テ忌避又ハ回避ノ申立ヲ認可シタル時ハ裁判所長更ニ他ノ判事ヲシテ豫審ヲ爲サシム可シ

其判事ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ前條審判事ノ爲シタル處分ト雖モ更ニ取調ヲ爲スヿヲ得

第二百四十四條　書記ハ自ラ回避シ又ハ檢事其他訴訟關係人ヨリ會議局ニ申立テ之ヲ忌避スルヿヲ得

第二百四十五條　檢察官ハ被告人又ハ民事原告人ヨリ之ヲ忌避スルヿヲ得ス若シ自ラ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其

旨ヲ會議局ニ申立ツルヿヲ得

檢事補自ラ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ檢事ニ申立ツ可シ檢事ハ其申立ヲ許否ス可シ

第二百四十六條　檢事ハ總テ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スヿヲ得

民事原告人ハ私訴ニ付キ越權ノ處分アルニ因リ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スヿヲ得

被告人ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スヿヲ得

輕罪裁判所又ハ違警罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シテハ豫審判事ノ管轄違越權又ハ其事件ヲ移ス可キ裁判所ノ管轄違ニ非サレハ故障ヲ爲スヿヲ得ス

第二百四十七條　故障ノ期限ハ一日ナリトス但言渡書ノ送達アリタルヨリ之ヲ起算ス

第二百四十八條　擬事民事原告人及ヒ被告人故障ヲ爲スニハ申立書ヲ書記局ニ差出ス可シ書記ハ速ニ其旨ヲ對手人ニ通知ス可シ

故障申立人ハ三日内ニ趣意書ヲ書記局ニ差出ス可シ書記ハ速ニ趣意書ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日内ニ答辯書ヲ差出スヿヲ得

第二百四十九條　故障アリタル時ハ對手人ヨリ其判決アルマテ何時ニテモ附帶ノ故障ヲ爲スヿヲ得

附帶ノ故障アリタル時ハ書記ヨリ其趣意書ヲ對手人ニ送達ス可シ對手人ハ三日内ニ答辯書ヲ差出スヿヲ得

第二百五十條　豫審終結ノ言渡ハ故障ノ期限内又故障アリタル時ハ其判決アルマテ執行ヲ停止ス但被告人ヲ勾留シ又ハ保釋責付ヲ取消スノ言渡ハ其執行ヲ停止セス

第二百五十一條　書記ハ故障趣意書答辯書其他訴訟書類ヲ會議局ニ差出ス可シ

第二百五十二條　會議局ニ於テハ第二百三十六條ノ規則ニ從ヒ故障ノ判決ヲ爲ス可シ

豫審判事ノ言渡ヲ認可シタル時ハ其旨ヲ言渡シ若シ其全部又ハ幾分ヲ取消シタル時ハ全部ニ付キ更ニ言渡ヲ爲ス可シ

又被告人ヲ保釋貸付シ又ハ勾留スルノ言渡ヲ爲スヿヲ得

第二百五十三條　會議局ニ於テ必要ナリトスル時ハ判事一名ヲシテ更ニ豫審ヲ爲シ又ハ其指示スル所ノ條件ニ付キ更ニ取調ヲ爲シ其報告書ヲ差出サシム可シ

第二百五十四條　會議局ニ於テ故障ノ取調中管轄違越權又ハ公訴受理ス可カラサルヿヲ發見シタル時ハ職權ヲ以テ豫審判事ノ言渡ヲ取消スヿヲ得

第二百五十五條　會議局ニ於テ故障ノ取調中共犯ノ起訴ヲ受クサル者アルヿ附帶ノ犯罪ニ付キ豫審ヲ受クサル者アルヿヲ發見シタル時ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲シ其報告書ヲ差出サシム可シ

檢事ハ意見書ヲ差出ス可シ

會議局ニ於テハ報告書其他訴訟書類ニ依リ故障ト共ニ之ヲ判決ス可シ

第二百五十六條　故障ノ判決アリタル時ハ速ニ其言渡書ノ謄本ヲ檢事民事原告人及ヒ被告人ニ送達ス可シ

第二百五十七條　檢事其他訴訟關係人ハ會議局ノ言渡ニ對シ上告ヲ爲スヿヲ得

第二百五十八條　被告人ニ送達ス可キ言渡書ニハ其言渡ニ對シ上訴スルヲ得可キヿ及ヒ其期限ヲ記載ス可シ其記載ナキ時ハ規則ニ從ヒ更ニ言渡書ノ送達アルマテ被告人上訴ノ權ヲ失フヿナカル可シ

第二百五十九條　第三百十一條ヨリ第三百十三條マテノ規則ハ豫審ノ上訴ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第二百六十條　重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ檢事其言渡書ニ一切ノ書類ヲ添ヘ速ニ之ヲ控訴裁判所檢事長ニ送致ス可シ

檢事長ハ一切ノ書類證據物件及ヒ被告人ヲ重罪裁判所ニ移スノ處分ヲ檢事ニ命ス可シ

重罪裁判所以外ノ裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ檢事速ニ其執行ヲ爲ス可シ

第二百六十一條　豫審ニ於テ被告人免訴ノ言渡ヲ受ケ其言渡確定シタル時ハ罪名ノ變更アルモ同一ノ事件ニ付キ更ニ訴ヲ受クルヿナカル可シ但新ナル證憑アル時ハ此限ニ在ラス

新ナル證憑アル時ハ檢事ヨリ之ヲ會議局ニ差出シ會議局ニ於テハ其起訴ヲ許ス可キヤ否ヲ判決ス可シ

第四編　公判

第一章　通則

第二百六十二條　訴訟事件ハ書記局ノ簿冊ニ登記シタル順序ニ從ヒ之ヲ公判ニ付ス可シ

裁判所長ハ未決勾留ノ日數ヲ減縮スル爲メ職權ヲ以テ其順序ヲ變更スルヿヲ得

又重要ナル事由ノ爲メ檢察官其他訴訟關係人ノ請求アリタ

ル時モ亦順序ヲ變更スルヿヲ得

第二百六十三條　重罪輕罪逆辯罪ノ訊問辯論及ヒ裁判言渡ハ之ヲ公行ス否ラサル時ハ其言渡ノ效ナカル可シ

第二百六十四條　被告事件公安ヲ害シ又ハ猥褻ニ渉リ風俗ヲ害スルノ恐アル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訊問及ヒ辯論ノ傍聽ヲ禁スルヿヲ得其裁判言渡ヲ爲スニ當テハ傍聽ヲ許ス可シ

第二百六十五條　被告人ハ公廷ニ於テ身體ノ拘束ヲ受クルヿナシ但守卒ヲ置クヿアル可シ

禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人疾病アルニ非スシテ出廷ヲ肯セサル時ハ之ヲ引致スルヿヲ得若シ出廷シテ辯論スルヿヲ肯セサル時ハ對審トシテ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第二百六十六條　被告人ハ辯論ノ爲メ辯護人ヲ用フルヿヲ得辯護人ハ裁判所々屬ノ代言人中ヨリ之ヲ選任ス可シ但裁判所ノ允許ヲ得タル時ハ代言人ニ非サル者ト雖モ辯護人ト爲スヿヲ得

第二百六十七條　被告人公廷ニ於テ暴行又ハ喧噪ヲ爲シ辯論ヲ妨礙スル時ハ裁判長ヨリ再度告戒ヲ爲シ仍ホ之ニ從ハサル時ハ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ被告人ヲ退廷セシメ若クハ勾留スルヿヲ得

前項ノ場合ニ於テハ對審トシテ引續キ辯論及ヒ裁判言渡ヲ爲スヿヲ得

若シ辯論二日ニ渉ル時ハ更ニ被告人ヲ出廷セシム可シ

第二百六十八條　被告人精神錯亂又ハ疾病ニ因リ出廷スル能ハサル時ハ痊癒ニ至ルマテ辯論ヲ停止ス

辯論ニ取掛リタル後被告人精神錯亂シタル時ハ其痊癒ノ後新ニ辯論ヲ爲ス可シ其他ノ疾病ニ罹ル時ハ痊癒ノ後前ニ停止シタルヨリ以後ノ手續ヲ爲ス可シ但五日間辯論ヲ停止シ又ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求アリタル時ハ新ニ辯論ヲ爲ス可シ

若シ被告事件及ヒ法律ノ適用ニ付キ既ニ辯論ヲ終リタル時ハ其痊癒ノ後更ニ取調ヲ爲スヿナク裁判言渡ヲ爲ス可シ

第二百六十九條　禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人公判ノ日時

ニ出廷セスト雖モ豫審終結ノ言渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達シタルノ證アルニ非サレハ闕席裁判ヲ爲ス可カラス

豫審終結ノ言渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達スルヿ能ハサル場合ニ於テハ裁判所ニテ猶豫ノ期限ヲ定メ其期限內ニ被告人出廷セサル時ハ闕席裁判ヲ爲ス可キノ告知書ヲ親屬若クハ戶長ニ送達ス可シ

第二百七十條　闕席シタル被告人ニ付テハ辯護人ヲ用フルヿヲ許サス但其親屬故舊ハ被告人出廷スルヿ能ハサルノ事由ヲ證明スルヿヲ得

裁判所ニ於テ其事由ヲ正當ナリトスル時ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ裁判ヲ延期スルヿヲ得

第二百七十一條　被告人中ノ一名又ハ數名出廷セスト雖モ出廷シタル者ニ付テハ通常ノ規則ニ從ヒ對審裁判ヲ爲ス可シ

第二百七十二條　裁判長ハ公廷ニ於テ諸般ノ取締ノ爲メ相當ノ處置ヲ爲ス可シ

稱讃誹謗其他辯論ヲ妨礙スル者アル時ハ之ヲ制止シ又ハ退廷セシムルヿヲ得

第二百七十三條　公廷ニ於テ輕罪違警罪ヲ犯シタル者アル時ハ其身分ノ如何ニ拘ハラス裁判長ノ命令ニ因リ之ヲ取押ヘ檢察官ノ意見ヲ聽キ直チニ裁判ヲ爲シ又ハ次ノ公判ニ付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

書記ハ犯罪ノ事件及ヒ裁判長ノ處分ニ付キ即時ニ調書ヲ作ル可シ

第二百七十四條　前條ノ場合ニ於テ違警罪裁判所ニテハ違警罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲シ輕罪ニ付キ始審ノ裁判ヲ爲ス可シ

輕罪裁判所其他上等ノ裁判所ニテハ輕罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲ス可シ

第二百七十五條　公廷ニ於テ重罪ヲ犯シタル者アル時ハ裁判長被告人及ヒ證人ヲ訊問シ調書ヲ作リ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ通常ノ規則ニ從ヒ裁判スル爲メ豫審判事ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百七十六條　裁判所ニ於テハ訴ヲ受ケサル事件ニ付キ裁

判ヲ爲ス可カラス但辯論ニ因リ發見シタル附帶ノ事件及ヒ公廷内ノ犯罪ニ付テハ此限ニ在ラス

若シ附帶ノ事件ニ付キ豫審ヲ必要ナリトスル時ハ本案ノ裁判ヲ停止スルヿヲ得

第二百七十七條　檢察官被告人及ヒ民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハス本案ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサルノ申立ヲ爲スヿヲ得

裁判所ニ於テハ職權ヲ以テ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサルノ言渡ヲ爲スヿヲ得

第二百七十八條　裁判所ニ於テ前條ノ申立ヲ棄却シタル時ハ本案ノ裁判言渡ヲ待タス直チニ控訴又ハ上告ヲ爲スヿヲ得

此場合ニ於テハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第二百七十九條　檢察官其他訴訟關係人ハ第二百三十七條ニ定メタル原由アル時ハ違警罪裁判所輕罪裁判所控訴裁判所又ハ重罪裁判所ノ裁判官及ヒ書記ニ對シ忌避ノ申立ヲ爲スヿヲ得

豫審ヲ爲シタル裁判官其公判ニ干預シ又ハ始審裁判ヲ爲シタル裁判官其終審裁判ニ干預シタル時亦同シ

第二百八十條　忌避ノ申立ハ本案ノ裁判言渡ニ至ルマテ何時ニテモ之ヲ爲スヿヲ得

忌避ノ申立アリタル時ハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第二百八十一條　忌避又ハ回避ノ申立及ヒ其判決ヲ爲スニハ

第二百三十八條ヨリ第二百四十五條マテニ定メタル規則ニ從フ

第二百八十二條　忌避又ハ回避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ前ニ停止シタルヨリ以後ノ手續ニ取掛ル可シ但五日間辯論ヲ停止シタル時ハ新ニ辯論ヲ爲ス可シ

變災厄難ノ爲メ訴訟手續ヲ停止シタル時亦同シ

第二百八十三條　公判ニ於テ用フ可キ證據ハ豫審ニ於テ用フ可キ證據ニ同シ

第二百八十四條　裁判長ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ豫審中當職官吏ノ作リタル調書及ヒ檢證書類ヲ朗讀セシムルヿヲ得

是等ノ書類ハ原被證人ノ陳述ト同一ノ效ヲ有ス

第二百八十五條　調書ヲ作リタル司法警察官ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ證人トシテ之ヲ呼出シ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ之ヲ呼出スヿヲ得

豫審判事ハ裁判所ノ職權ニ因リ又ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ其裁判所ノ允許ヲ得テ調書說明ノ爲メ之ヲ呼出スヿヲ得

第二百八十六條　豫審ニ於テ訊問シタル證人ハ更ニ之ヲ呼出スヿヲ得

豫審ニ於テ錄取シタル證人ノ陳述書ハ更ニ其證人ヲ呼出サヽル時證人呼出ヲ受ケ出廷セサル時又ハ豫審及ヒ公判ニ於

テノ陳述ヲ比較ス可キ時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判長ノ職權ヲ以テ之ヲ朗讀セシムルヿヲ得

第二百八十七條　第百七十八條以下ノ規則ハ公判ノ證人ニモ亦之ヲ適用ス

第二百八十八條　證人ハ互ニ言語ヲ接ス可カラス又陳述前辯論ニ立會フ可カラス

第二百八十九條　證人ハ左ノ順序ニ從ヒ訊問ス可シ

一　檢察官ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

二　民事原告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

三　被告人及ヒ民事擔當人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

第二百九十條　證人數名アル時ハ氏名目錄ノ順序ニ從ヒ之ヲ訊問ス可シ但裁判長ハ證人ヲ呼出シタル者ノ意見ヲ聽キ其順序ヲ變更スルヿヲ得

第二百九十一條　證人及ヒ被告人ハ裁判長ニ非サレハ之ヲ訊問スルヿヲ得ス

陪席判事及ヒ檢察官ハ裁判長ニ告ケ證人及ヒ被告人ヲ訊問スルヿヲ得

訴訟關係人ハ辯論ニ必要ナリトスル條件ヲ分明ナラシムル爲メ證人ヲ訊問ス可キヿヲ裁判長ニ求ムルヲ得

第二百九十二條　證人ノ陳述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト憑料シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ取押ヘ勾引

狀ヲ以テ豫審判事ニ送致ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ

其證人ノ陳述ハ書記之ヲ錄取シ豫審判事ニ送致ス可シ

本條ノ場合ニ於テハ裁判所ニテ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ本案ノ事件ニ付キ裁判ノ延期ヲ言渡スヿヲ得

第二百九十三條　證人呼出ニ應セサル時ハ裁判所ニ於テ即時ニ檢察官ノ意見ヲ聽キ左ノ科料罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

一　違警罪事件ニ付テハ五十錢以上一圓九十五錢以下ノ科料

二　輕罪以上ノ事件ニ付テハ二圓以上十圓以下ノ罰金

被告人闕席シタル時ハ其呼出シタル證人出廷セスト雖モ科料罰金ヲ言渡ス可カラス

第二百九十四條　前條ノ言渡書ハ即時ニ書記ヨリ本人ニ送達ス可シ

其言渡ヲ受ケタル者三日内ニ出廷スルヿ能ハサリシ正當ノ事由ヲ證明シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ科料又ハ罰金ノ言渡ヲ取消ス可シ

但重罪裁判所閉廷ノ後ハ其開廷シタル裁判所ニ其申立ヲ爲ス可シ

第二百九十五條　證人呼出ニ應セサル時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公判ヲ延期スル

ノ言渡ヲ爲スヿヲ得

檢察官自ラ其請求ヲ爲サントスル時ハ公判ノ延期ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

第二百九十六條　證人再度ノ呼出ヲ受ケ仍ホ出廷セサル時ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ前ニ定メタル科料罰金ノ二倍及ヒ再度ノ呼出ノ費用ヲ言渡ス可シ此場合ニ於テモ亦前條ニ從ヒ再ヒ公判ヲ延期スルヿヲ得但延期シタル時ハ其證人ニ對シ勾引狀ヲ發ス可シ

第二百九十七條　第百九十一條以下ノ規則ハ公判ニ於テ新ニ命シタル鑑定人ニモ亦之ヲ適用ス但呼出ニ應セサル時ハ第二百九十三條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ

鑑定人ノ鑑定シタル事件ニ付キ説明ノ爲メ更ニ之ヲ呼出ス時ハ證人ニ付キ定メタル前數條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ

第二百九十八條　被告人聾者啞者又ハ國語ニ通セサル者ナル時ハ第百五十六條第百五十七條ノ規則ニ從フ

第二百九十九條　被告人數名アル時ハ裁判長其意見ヲ述ヘ且檢察官其他訴訟關係人ノ意見ヲ聽キ訊問ノ順序ヲ定ム可シ

裁判長ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ職權ヲ以テ其順序ヲ變更スルヿヲ得

第三百條　證據調濟ノ後檢察官民事原告人被告人其辯護人及ヒ民事擔當人ハ順次發言ス可シ

檢察官其他訴訟關係人ノ陳述ハ他ヨリ妨礙スルヿヲ得ス

檢察官其他訴訟關係人ハ迭ヒニ辯論ヲ爲スヿヲ得但辯論ノ最終ニハ被告人又ハ辯護人ヲシテ發言セシム可シ

第三百一條　檢察官公訴ヲ拋棄スト雖モ裁判所ニ於テハ本案ニ付キ相當ノ裁判ヲ爲ス可シ

第三百二條　辯論中公判ノ手續ニ付キ異議ノ申立アリタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ直チニ之ヲ判決ス可シ

但其判決ニ對スル控訴又ハ上告ハ本案ノ裁判言渡アリタル後ニ非サレハ之ヲ爲スヿヲ得ス

第三百三條　民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハス何時ニテモ其訴訟ニ關係スルヿヲ得

又民事原告人ハ民事擔當人ヲシテ其訴訟ニ關係セシムルヿヲ得

若シ異議ノ申立アリタル時ハ其裁判所ニ於テ之ヲ判決ス可シ其判決ニ對シテハ本案ノ裁判言渡ヲ待タス直チニ控訴又ハ上告ヲ爲スヿヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第三百四條　判判所ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲スニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ明示シ且一切ノ證憑ヲ明示ス可シ

免訴ノ言渡ヲ爲スニ付テモ亦同シ

第三百五條　無罪ノ言渡ヲ爲スニハ其理由トシテ被告人ニ對シ犯罪ノ證憑ナキヿヲ明示ス可シ

第三百六條　裁判所ニ於テハ公訴ノ裁判ト同時ニ私訴ノ裁判

言渡ヲ爲ス可シ

私訴ニ付キ取調未タ充分ナラサル時ハ公訴ノ裁判アリタル後其裁判言渡ヲ爲スヿヲ得

第三百七條　被告人刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公訴裁判費用ノ全部又ハ幾分ヲ擔當ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ

免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テ公訴裁判費用ハ官ニテ之ヲ擔當ス可シ

私訴裁判費用ハ民事ノ規則ニ從ヒ敗訴シタル者之ヲ擔當ス可シ

第三百八條　被告人刑ノ言渡ヲ受ケタルト否トヲ問ハス沒收ニ係ラサル差押物品ハ所有主ノ請求ナシト雖モ之ヲ還付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百九條　本案ノ裁判言渡ニ對スル上訴ノ期限内又上訴アリタル時ハ其判決アルマテ裁判執行ヲ停止ス

第三百十條　禁錮以上ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡シタル時ハ現ニ捕ニ就クニ非サレハ上訴ヲ爲スヿヲ得ス

第三百十一條　勾留ヲ受ケタル者上訴ヲ爲シ又ハ保釋ヲ求ム時ハ其申立書ヲ監獄長ニ差出シ監獄長ヨリ之ヲ其裁判所ノ書記ニ差出ス可シ

第三百十二條　訴訟關係人又ハ其代人非常ノ變災厄難ニ因リ上訴期限ヲ經過シタル場合ニ於テ其旨ヲ證明シタル時ハ期

限ヲ經過シタルニ因リ失ヒタル權利ヲ回復スルヿヲ得但變災厄難ヲ免カレタルヨリ通常ノ期限内ニ其證據ヲ申立書ニ添ヘ上訴ヲ爲ス可シ

第三百十三條　書記ハ速ニ前條ノ申立書ヲ對手人ニ送達ス可シ對手人ハ三日内ニ答辯書ヲ差出スヿヲ得

上訴ヲ判決ス可キ裁判所ニ於テハ會議局ニテ檢察官ノ意見ヲ聽キ先ツ其上訴ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ

上訴ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ書記ヲシテ其旨ヲ訴訟關係人ニ通知セシメ通常ノ規則ニ從ヒ本案ノ裁判ヲ爲ス可シ

上訴ヲ受理ス可カラサル者ト判決シタル時ハ他ノ原由アルニ非サレハ即時ニ裁判執行ヲ爲サシム可シ

第三百十四條　裁判言渡ハ辯論ヲ終リタル後公廷ニ於テ即時ニ之ヲ爲シ又ハ次日ニ之ヲ爲ス可シ

裁判言渡書ハ其言渡前裁判官之ヲ作リ書記ト共ニ署名捺印ス可シ

裁判言渡書ニハ其言渡ヲ爲シタル裁判所年月日其事件ニ干預シタル檢察官ノ氏名ヲ記載ス可シ

第三百十五條　訴訟關係人ハ其費用ヲ以テ裁判言渡書ノ謄本又ハ其拔書ヲ求ムルヿヲ得但上訴ノ爲メ其求ヲ爲シタル時ハ書記ヨリ二十四時内ニ之ヲ下付ス可シ

第三百十六條　對審裁判ニ因リ刑ノ言渡アリタル時ハ裁判長

ヨリ其言渡ヲ受クタル者ニ前條ノ請求及ヒ其言渡ニ對シ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ得可キ「及ヒ其期限ヲ告知シ又爾席裁判ニ因リ刑ノ言渡アリタル時ハ其言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得可キ「及ヒ其期限ヲ言渡書ニ記載ス可シ

若シ其告知又ハ記載ナキ時ハ通常ノ規則ニ從ヒ其告知アルマテ上訴期限ノ經過ヲ停止ス

第三百十七條　書記ハ各事件ニ付キ各別ニ公判始末書ヲ作リ左ノ條件其他一切ノ訴訟手續ヲ記載ス可シ

一　裁判ヲ公行シタル「又ハ傍聽ヲ禁スルノ言渡アリタル「及ヒ其事由

二　被告人ノ訊問及ヒ其陳述

三　證人鑑定人ノ陳述及ヒ宣誓ヲ爲シタル「若シ宣誓ヲ爲サヽル時ハ其事由

四　原被ノ證據物件

五　辯論中異議ノ申立アリタル「後日ヲ期シテ申立ツ可キ事件ヲ申立タル「是等ノ事件ニ付キ檢察官其他訴訟關係人ノ意見及ヒ裁判所ノ判決

六　辯論ノ順序及ヒ被告人ヲシテ最終ニ發言セシメタル「

第三百十八條　公判始末書ニハ前條ニ記載シタル條件ノ外言渡ヲ爲シタル裁判所年月日裁判長陪席判事檢察官及ヒ書記ノ氏名ヲ記載ス可シ

辯論數日ニ渉ル時ハ其旨及ヒ同一ノ裁判官出席シタル「ヲ

記載ス可シ

辯論中豫備判事ヲシテ代ラシメタル時ハ其旨ヲ記載ス可シ

檢察官及ヒ書記ニ付テモ亦同シ

第三百十九條　公判始末書ハ裁判言渡ヨリ三日内ニ之ヲ整頓シ裁判長及ヒ書記署名捺印ス可シ

裁判長ハ署名捺印セサル以前ニ公判始末書ヲ檢閲シ若シ意見アル時ハ其紙尾ニ記載ス可シ

第三百二十條　裁判言渡書及ヒ公判始末書ノ正本ハ其裁判所ノ書記局ニ保存ス可シ

上訴アリタル時ハ裁判長及ヒ書記裁判言渡書及ヒ公判始末書ノ謄本ニ認印シ之ヲ上訴書類ニ添フ可シ

第二章　違警罪公判

第三百二十一條　違警罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

一　檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發シタル呼出狀

二　豫審判事又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

第三百二十二條　呼出狀ニハ呼出ヲ受ク可キ者ノ氏名職業住所出廷ノ日時被告事件及ヒ代人ヲシテ出廷セシムルヿヲ得可キ旨ヲ記載ス可シ若シ被告事件ノ記載ナキ場合ニ於テ被告人求タ其證人ヲ呼出サヽル時ハ公廷ニテ其事件ノ告知ヲ

受ケタル後其呼出及ヒ辯護ノ爲メ二日ノ猶豫ヲ求ムルヿヲ得

第三百二十三條　呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

第三百二十四條　違警罪裁判官ハ被告事件急速ヲ要スル時ハ公判ニ取掛ル前檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ對手人ノ立會ヲ要セスシテ檢證處分ヲ爲スヿヲ得

第三百二十五條　證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

又呼出ヲ受ケスシテ出廷シタル者ト雖モ訊問前其名刺ヲ書記ニ差出シタル時ハ裁判所ニ於テ證人トシテ其陳述ヲ聽クヿヲ得

第三百二十六條　書記ハ各事件毎ニ訴訟關係人ノ氏名ヲ呼立ツ可シ若シ其呼立ニ應セサル時ハ他ノ事件ノ裁判ヲ終リタル後其事件ヲ裁判ス可シ

第三百二十七條　違警罪裁判官ハ最初ニ被告人ノ氏名年齡身分職業住所出生ノ地ヲ問フ可シ

官吏ノ作リタル調書又ハ申立書アル時ハ書記之ヲ朗讀ス可シ

檢察官ハ被告事件ヲ陳述ス可シ

第三百二十八條　違警罪裁判官ハ被告人ニ被告事件ヲ承認スルヤ否ヲ訊問ス可シ

若シ被告人代人ヲ以テ白狀ヲ爲ス時ハ其署名捺印シタル書面ヲ差出ス可シ

第三百二十九條　被告人ノ白狀アリタル時ハ他ノ證憑ヲ差出スニ及ハス但裁判所ニ於テハ檢察官民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ差出サシムルヿヲ得

若シ白狀ナキ時ハ原被ノ證人ヲ訊問シ其他證憑アル時ハ之ヲ差出ス可シ

第三百三十條　檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ被害事件ヲ證明シ及ヒ要償ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

被告人民事擔當人又ハ其代人ハ答辯ヲ爲ス可シ

第三百三十一條　呼出ヲ受ケタル被告人民事擔當人又ハ其代人出廷セサル時ハ檢察官及ヒ民事原告人ノ請求スル所ヲ聽キ闕席裁判ヲ爲ス可シ

民事原告人出廷セサル時亦同シ

第三百三十二條　闕席裁判言渡書ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ闕席シタル者又ハ其住所ニ之ヲ送達ス可シ

闕席裁判ヲ受ケタル者故障ヲ爲サントスル時ハ言渡書ノ送達アリタルヨリ三日内ニ其申立書ヲ書記局ニ差出ス可シ

第三百三十三條　裁判所ニ於テハ先ツ故障ノ申立ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ若シ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ書

記ヨリ故障アリタルヿ及ヒ其事件ヲ公判ニ付ス可キ日時ヲ故障ノ對手人ニ通知スル爲メ呼出狀ヲ送達ス可シ但其送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

又公判ニ付ス可キ日時ヲ其前日ニ故障ノ申立人ニ報知ス可シ

第三百三十四條　故障ノ申立ヲ受理シタル場合ニ於テハ第三百二十六條ヨリ第三百三十條マテノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲ス可シ

其裁判ニ關席シタル者ハ故障ヲ爲スヿヲ得ス

第三百三十五條　犯罪ノ證憑充分ナラサル時ハ裁判所ニ於テ無罪ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百三十六條　被告事件違警罪ニシテ且證憑充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百三十七條　被告事件重罪又ハ輕罪ナル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲シ其事件ヲ輕罪裁判所檢事ニ送致ス可シ但被告人ニ對シ勾留狀ヲ發スルヿヲ得

第三百三十八條　違警罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ左ノ區別ニ從ヒ輕罪裁判所ニ控訴スルヿヲ得

一　被告人ハ拘留ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時

二　民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ要償ニ付テノ言渡

民事上治安裁判所ノ終審ノ金額ヲ超過シタル時

三　檢察官其他訴訟關係人ハ上ニ記載シタル原由アラサル時ト雖モ誓轄違越權擬律ノ錯誤又ハ無效ノ記載アル規則ニ背キタル時

第三百三十九條　控訴ヲ爲サントスル者ハ原裁判所ノ書記局ニ其申立書ヲ差出ス可シ但其申立ノ期限ハ對審裁判ニ付テハ言渡ヨリ三日內又闕席裁判ニ付キ故障アラサル時ハ本人又ハ其住所ニ言渡書ノ送達アリタルヨリ五日內トス

控訴ヲ爲スノ申立アリタル時ハ書記ヨリ其旨ヲ對手人ニ通知ス可シ

第三百四十條　訴訟ニ關スル一切ノ書類ハ檢察官ヨリ控訴ヲ受ク可キ裁判所ノ書記局ニ之ヲ送致ス可シ

若シ檢察官控訴ノ申立人又ハ對手人ナル時ハ控訴ヲ受ク可キ裁判所ノ檢察官ニ其意見書ヲ差出ス可シ

第三百四十一條　控訴ヲ受ク可キ裁判所ニ於テハ書記局ヨリ訴訟關係人ニ對シ呼出狀ヲ發シタル後其裁判ニ取掛ル可シ

呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ一日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百四十二條　控訴ノ對手人ハ其裁判言渡アルマテ何時ニテモ附帶ノ控訴ヲ爲スヿヲ得但附帶ノ控訴ハ公廷ニ於テ直

ナニ之ヲ申立ルヿヲ得

第三百四十三條　控訴ニ係ル事件ハ輕罪ノ裁判ヲ爲スニ付キ定メタル規則ニ從ヒ之ヲ裁判ス可シ

檢察官其他訴訟關係人ハ裁判長ノ允許ヲ得ルニ非サレハ新ナル證人又ハ始審ニ於テ陳述シタル證人ヲ呼出スヿヲ得ス

第三百四十四條　控訴ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ原裁判言渡ヲ認可スルノ言渡ヲ爲シ又ハ之ヲ取消シ更ニ裁判言渡ヲ爲ス可シ

被告人ノミ控訴ヲ爲シタル時ハ原裁判言渡ヨリ重キ刑ヲ言渡スヿヲ得ス

私訴ニ付テノ控訴ノ裁判ハ通常民事ノ規則ニ從フ

第三百四十五條　第三百三十一條以下ノ規則ハ控訴ノ闕席裁判ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第三百四十六條　檢察官其他訴訟關係人ハ違警罪事件ノ終審ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヿヲ得

第三章　輕罪公判

第三百四十七條　輕罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

一　檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發シタル呼出狀

二　豫審判事輕罪裁判所會議局又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ

因リ其事件ヲ移スノ言渡

第三百四十八條　呼出狀ニ付テハ第三百二十二條第三百二十三條ノ規則ニ從フ

第三百四十九條　被告事件罰金ノ刑ニ該ル可キ時ハ代人ヲシテ出廷セシムルヿヲ得可キ旨ヲ呼出狀ニ記載ス可シ

民事原告人及ヒ民事擔當人ハ代人ヲシテ出廷セシムルヿヲ得

第三百五十條　證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ一日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百五十一條　第三百二十四條ノ規則ハ豫審ヲ經サル輕罪事件ニモ亦之ヲ適用ス

第三百五十二條　檢察官ハ裁判長ヨリ被告人ノ氏名年齡職業住所及ヒ出生ノ地ヲ問ヒタル後被告事件ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ被害事件ヲ證明ス可シ

調書又ハ申立書アル時ハ書記ヲシテ之ヲ朗讀セシメ次ニ原被證人ノ陳述ヲ聽キ且證據物件ヲ被告人ニ示シ辯解ヲ爲サシム可シ

被告人及ヒ民事擔當人ハ答辯ヲ爲ス可シ

第三百五十三條　檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ要償ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

被告人及ヒ民事擔當人ハ更ニ答辯ヲ爲スヿヲ得

第三百五十四條　罰金ノ刑ニ該ル可キ被告人又ハ第二百六十九條ノ規則ニ從ヒ闕席裁判ヲ爲スヿヲ得可キ被告人其呼出ノ日時ニ出廷セサル時ハ闕席裁判ヲ爲ス可シ

第三百五十五條　闕席裁判ニ關スル第三百三十一條ヨリ第三百三十四條マテノ規則ハ此章ニモ亦之ヲ適用ス

第三百五十六條　闕席裁判ニ因リ禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ左ノ場合ヲ除クノ外刑ノ期滿免除ニ至ルマテ故障ヲ爲スヿヲ得

一　被告人本案ノ裁判前豫メ裁判ス可キ事件ヲ申立タル時

二　裁判言渡書ヲ本人ニ送達シタル時

三　被告人裁判執行ニ因リ刑ノ言渡アリタルヿヲ知リタル

ノ證アル時

第一ノ場合ニ於テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ第二第三ノ場合ニ於テハ言渡アリタルヿヲ知リタルヨリ三日內ニ故障ヲ爲スヿヲ得

第三百五十七條　裁判所ニ於テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ新ナル證人ヲ呼出シ鑑定人ヲ命シ若クハ臨檢ヲ爲スヿヲ得但是等ノ處分ヲ爲スニ付テハ第三編第三章ニ定メタル規則ニ從フ

又豫審ヲ經サル事件ニ付テハ豫審判事ヲシテ其指示スル所ノ條件ニ付キ取調ヲ爲シ且其報告書ヲ差出サシムルヿヲ

第三百五十八條　犯罪ノ證憑充分ナラサル時ハ裁判所ニ於テ無罪ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

本條ノ場合ニ於テ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百五十九條　被告事件違警罪ナル時ハ終審ノ裁判言渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百六十條　被告事件重罪ナル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲シ若シ豫審ヲ經サル時ハ豫審判事ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

但被告人勾留ヲ受ケサル時ハ勾引狀ヲ發ス可シ

訴訟書類及ヒ證據物件ハ檢察官ヨリ之ヲ豫審判事ニ送致ス可シ

第三百六十一條　被告事件豫審ヲ經タル時ハ之ヲ其裁判所ノ會議局ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

會議局ニ於テハ第二百五十三條第二百五十五條ノ規則ニ從ヒ取調ヲ爲シ被告人ヲ管轄裁判所ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百六十二條　會議局ノ言渡ニ因リ事件ヲ受理シタル場合ニ於テ新ナル證憑ヲ發見スルヿナクシテ其事件ヲ重罪ナリトスル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲ス可シ

捜査ハ大審院ニ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲ス可シ

第三百六十三條　前二條ノ場合ニ於テハ會議局又ハ大審院ノ判決アルマデ捜察官ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ被告人ヲ其裁判所ノ監倉ニ留置スルノ言渡ヲ爲スヿヲ得又第三百十條以下ノ規則ニ從ヒ保釋ニ付キ判決ヲ爲スヿヲ得

第三百六十四條　被告事件輕罪ニシテ且證據充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

被告人禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ當然保釋責付ヲ取消シタル者トス但上訴中更ニ保釋ヲ求ムルヿヲ得

第三百六十五條　捜察官其他訴訟關係人ハ左ノ區別ニ從ヒ輕罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シ控訴裁判所ニ控訴スルヿヲ得

一　捜察官ハ無罪免訴又ハ刑ノ言渡アリタル時但違警罪事件トシテ言渡アリタル場合ニ於テハ其事件ヲ輕罪ナリトスル時

二　被告人ハ違警罪ニ付テノ言渡ヲ除クノ外刑ノ言渡ヲ受ケタル時

三　民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ要償ニ付テノ言渡民事上始審裁判所ノ終審ノ金額ヲ超過シタル時

四　捜察官其他訴訟關係人ハ管轄違越權擬律ノ錯誤又ハ無效ノ記載アル規則ニ背キタル時

第三百六十六條　控訴ハ裁判言渡アリタルヨリ五日内ニ之ヲ

爲スヿヲ得

闕席裁判ヲ受ケタル者ハ刑ノ期滿免除ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲サスシテ直チニ控訴ヲ爲スヿヲ得但第三百五十六條ノ場合ニ於テハ五日内ニ之ヲ爲ス可シ

第三百六十七條　公訴ノ裁判言渡ニ對シ控訴アリタル場合ニ於テ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ檢察官ヨリ之ヲ控訴裁判所ノ監倉ニ移ス可シ

第三百六十八條　第三百三十九條ヨリ第三百四十二條マテ及ヒ第三百四十四條ノ規則ハ此章ニモ亦之ヲ適用ス

第三百六十九條　輕罪裁判所檢事ノ控訴又ハ檢事長ノ附帶ノ控訴アリタル場合ニ於テ被告事件ヲ重罪ナリトスル時ハ第二百五十五條ノ規則ニ從ヒ會議局ニ於テ重罪裁判所ニ移ス

ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百七十條　控訴ノ闕席裁判及ヒ其故障ニ付テハ始審ノ闕席裁判及ヒ其故障ニ付キ定メタル規則ニ從フ

第三百七十一條　檢察官其他訴訟關係人ハ輕罪裁判所ノ終審ノ對審裁判言渡及ヒ控訴裁判所ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヿヲ得

第四章　重罪公判

第三百七十二條　重罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

一　豫審判事又ハ輕罪裁判所會議局ノ判決ニ因リ其事件ヲ

移スノ言渡

二　控訴裁判所又ハ大審院ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

第三百七十三條　重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ左ノ區別ニ從ヒ公訴狀ヲ作ル可シ

控訴裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事長公訴狀ヲ作ル可シ

始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事長公訴狀ヲ作リ又ハ重罪裁判所檢察官ノ職務ヲ行フ可キ檢事ヲシテ之ヲ作ラシム可シ

第三百七十四條　公訴狀ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

一　被告事件ノ始末及ヒ加重減輕ノ模樣

二　被告人ノ氏名年齡身分職業住所出生ノ地

三　證據ニ於テ集取シタル原被ノ證憑

四　罪名法律ノ正條及ヒ重罪裁判所ニ移スノ言渡ノ概畧

第三百七十五條　公訴狀ニハ重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ記載シタルヨリ以外ノ事件又ハ被告人ヲ記載ス可カラス

第三百七十六條　重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ同一ノ被告人ニ對シ附帶ニ非サル數箇ノ重罪ヲ記載シタル場合ニ於テ檢察官ハ各別ニ公訴狀ヲ作リタル上ニテ各別ニ辯論ヲ爲スヿヲ裁判所長ニ請求スルヲ得

裁判所長ハ同一ノ公訴狀ニ附帶ニ非サル數箇ノ重罪ヲ記載

シタル場合ニ於テ其職權ヲ以テ各別ニ辯論ヲ爲サシムルヿヲ得又數箇ノ公訴狀ニ記載シタル事件ニ付キ同時ニ辯論ヲ爲サシムルヿヲ得

第三百七十七條　書記ハ被告人出廷ヨリ少クトモ五日前ニ公訴狀ノ謄本ヲ被告人ニ送達ス可シ

被告人數名アル時ハ各別ニ其謄本ヲ送達ス可シ

第三百七十八條　重罪裁判所長又ハ其委任ヲ受ケタル陪席判事ハ公訴狀ノ送達アリタルヨリ二十四時ノ後書記ノ立會ニ依リ被告事件ニ付キ被告人ヲ訊問シ且辯護人ヲ選任シタリヤ否ヲ問フ可シ

若シ辯護人ヲ選任セサル時ハ裁判所長ノ職權ヲ以テ其裁判所々屬ノ代言人中ヨリ之ヲ選任ス可シ

被告人及ヒ代言人ヨリ異議ノ申立ナキ時ハ代言人一名ヲシテ被告人數名ノ辯護ヲ爲サシムルヿヲ得

辯護人ヲ選任シタルヨリ三日ノ後ニ非サレハ辯論ニ取掛ルヿヲ得ス

第三百七十九條　辯護人差支アル時若クハ被告人ヨリ之ヲ改選ス可キ正當ノ事由ヲ申立タル時被告人自ラ辯護人ヲ選任スルニ非サレハ前條ノ規則ニ從ヒ裁判所長ヨリ之ヲ選任ス可シ但辯護人ヲ改選シタル時ハ三日間辯論ヲ停止ス可シ

第三百八十條　書記ハ第三百七十八條ノ場合ニ於テ訊問ノ調書ヲ作リ辯護人ヲ選任スルニ付キ其式ヲ履行シタルヿヲ記

載ス可シ

辯論中辯護人ヲ改選シ及ヒ辯論ヲ停止シタル時ハ公判始末書ニ其旨ヲ記載ス可シ

第三百八十一條　辯護人ナクシテ辯論ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ノ效ナカル可シ

第三百七十七條ヨリ第三百七十九條マテノ規則ニ背キタルコアリト雖モ辯論ニ取掛ル前ニ非サレハ被告人ヨリ異議ノ申立ヲ爲スコトヲ得ス

第三百八十二條　辯護人ハ第三百七十八條ノ處分アリタル後被告人ト接見スルコトヲ得

又書記局ニ於テ一切ノ訴訟書類ヲ閲讀シ且之ヲ抄寫スルコトヲ得

辯護人ヲ除クノ外何人ト雖モ重罪裁判所ニ移スノ言渡アリタルヨリ裁判言渡アルマテ被告人ト接見スルコトヲ得ス但被告人現ニ勾留ヲ受クル地ノ裁判所長ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニ在ラス

第三百八十三條　檢察官及ヒ民事原告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人ノ氏名目錄ハ開廷ヨリ一日前之ヲ被告人ニ送達ス可シ

被告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人ノ氏名目錄ハ同上ノ期限内ニ書記ヨリ之ヲ檢察官ニ送致シ民事ニ付キ呼出シタル證人ノ氏名目錄ハ之ヲ民事原告人ニ送達ス可シ

第三百八十四條　前條ノ規則ニ從ヒ豫メ氏名ヲ通知セサル證人ノ陳述ハ事實參考ノ爲メニ非サレハ之ヲ聽クヿヲ得ス但對手人ヨリ異議ナキヿヲ申立タル時ハ證人トシテ其陳述ヲ聽クヿヲ得

第三百八十五條　證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百八十六條　裁判長ハ開廷ノ日ニ當リ公廷ニ於テ陪席判事檢察官ノ面前ニテ開廷ス可キヿヲ陳述ス可シ但被告人ヲ呼出ス可カラス

第三百八十七條　裁判長辯論二日以上ニ渉ル可シト思料シタル時ハ重罪裁判所々在ノ地ノ裁判所判事一名ヲ以テ豫備陪席判事ト爲スヿヲ得

第三百八十八條　裁判官檢察官及ヒ書記各其席ニ就キタル後即時ニ訊問及ヒ辯論ニ取掛ル可シ

裁判長ハ先ツ被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地ヲ問フ可シ

若シ其答辭ト豫審中ノ陳述ト齟齬アリト雖モ公訴狀ニ記載シタル被告人ニ相違ナキ時ハ引續キ辯論ヲ爲ス可シ

第三百八十九條　書記ハ呼出シタル證人ノ氏名ヲ呼立ツ可シ

其呼立ニ應シタル證人ハ扣席ニ退カシメ陳述ヲ爲スニ當リ順次ニ之ヲ呼入ル可シ

第三百九十條　裁判長ハ書記ヲシテ公訴狀ヲ朗讀セシムルニ付キ注意シテ聽クヲ可キヿヲ被告人ニ告知ス可シ

第三百九十一條　裁判長ハ書記前條ノ朗讀ヲ終リタル後被告人ヲ訊問ス可シ

被告人豫審中ニ白狀シタル事件ヲ確認セス又ハ之ヲ取消サントスル時ハ其事由ヲ辯明セシム可シ

被告人ノ白狀アリト雖モ仍ホ其取調ヲ爲サヽル可カラス

第三百九十二條　裁判長ハ前條ノ訊問ヲ終リタル後證憑ヲ差出スニ從ヒ其證憑ニ付キ辯解ヲ爲シ且自己ノ利益ト爲ル可キ反證ヲ差出スヲ得可キヿヲ被告人ニ告知ス可シ

第三百九十三條　裁判長ハ原告證人陳述ヲ終リタル毎ニ被告人ニ意見アリヤ否ヲ問フ可シ

第三百九十四條　證人ハ陳述ヲ爲シタル後其扣席ニ留ル可シ但裁判長ヨリ退廷ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニ在ラス

陪席判事檢察官被告人及ヒ民事原告人ハ更ニ證人ヲ訊問スルヿ又證人ヲシテ他ノ證人ト對質セシムルヿヲ請求スルヲ得

裁判長ハ職權ヲ以テ前項ノ處分ヲ爲スヿヲ得

第三百九十五條　裁判長ハ證人愛憎畏懼ノ念ヲ生シ被告人ノ面前ニ於テ充分ナル陳述ヲ爲スヿヲ得サル可シト思料シタル時ハ檢察官民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其證人ノ陳述中被告人ヲ退席セシムルヿヲ得

裁判長ハ證人陳述ヲ終リタル後再ヒ被告人ヲ公廷ニ呼入レ其陳述シタル條件ヲ告知シ且被告人ニ意見アル時ハ之ヲ申立シム可シ

第三百九十六條　裁判長ハ第三百條ニ定メタル手續ノ終リタル後公訴ニ付キ辯論ノ終結シタルヿヲ言渡ス可シ

第三百九十七條　檢察官及ヒ被告人ハ辯論中ニ發見シタル條件ニ付キ豫審ヲ求ムルヿヲ得裁判所ニ於テ其請求ヲ認可シタル時ハ重罪裁判所ヲ開キタル裁判所ノ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲シ且其報告書ヲ差出サシム可シ

第三百五十七條第一項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第三百九十八條　辯論終結ノ言渡アリタル時ハ檢察官法律適用ノ爲メ其意見ヲ陳述ス可シ

被告人及ヒ辯護人ハ檢察官ノ意見其當ヲ得サルヿヲ辯論スルヲ得

第三百九十九條　前條ノ辯論ヲ終リタル後民事原告人ハ私訴ニ付キ其請求スル所ヲ陳述ス可シ被告人辯護人及ヒ民事擔當人ハ答辯ヲ爲スヿヲ得

檢察官ハ私訴ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

裁判所ニ於テハ私訴ノ辯論ヲ延期スルヿヲ得但開廷前之ヲ判決ス可シ

第四百條　被告事件重罪ニシテ且證憑充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲シ且被告人ヲ放免ス可シ

第四百一條　犯罪ノ證憑充分ナラサル時ハ無罪ノ言渡ヲ爲シ且被告人ヲ放免ス可シ

又原被ノ要償ニ付キ第三百九十九條ノ規則ニ從ヒ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第四百二條　辯論中公訴狀ニ記載シタル事件ニ附帶セサル他ノ重罪輕罪ヲ發見シタル場合ニ於テ檢察官ノ請求アル時ハ重罪裁判所ヲ開キタル裁判所ノ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲サシメ本會又ハ次會ニ於テ本案ノ事件ト共ニ之ヲ裁判ス可シ

第四百三條　檢察官其他訴訟關係人ハ重罪裁判所ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヿヲ得

第四百四條　關席裁判ヲ爲スニハ裁判長書記ナシテ公訴狀及ヒ必要ナリトスレ像審書類ヲ朗讀セシメ又原被證人ノ陳述ヲ聽ク可シ

檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述シ民事原告人ハ要償ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

民事擔當人ハ答辯スルヿヲ得

第四百五條　關席裁判言渡書ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ本人又ハ其住所ニ送達ス可シ

第四百六條　關席裁判ニ係ル刑ノ言渡ニ對シテハ檢察官ニ非

サレハ上告ヲ爲スヿヲ得ス

民事原告人及ヒ民事擔當人ハ私訴ノ裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヿヲ得

第四百七條　闕席裁判ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ハ刑ノ期滿免除ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲スヿヲ得但捕ニ就キタル時ハ十日内ニ故障ヲ爲ス可シ

第四百八條　故障ノ申立ハ闕席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所ニ之ヲ爲ス可シ

重罪裁判所ニ於テハ先ツ其故障ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ

其故障ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ本會又ハ次會ニ於テ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲ス可シ

第四百九條　闕席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所閉廳ノ後ハ其地ヲ管轄スル控訴裁判所ニ故障ノ申立ヲ爲ス可シ

控訴裁判所ニ於テ其故障ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ重罪裁判所ノ裁判ヲ受ク可キノ言渡ヲ爲ス可シ

第五編　大審院ノ職務

第一章　上告

第四百十條　檢察官及ヒ被告人ハ豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ左ノ場合ニ於テ上告ヲ爲スヿヲ得

一　法律ニ背キ忌避ノ申立ヲ認可セサル時

二　裁判所ノ構成規則ニ背キタル時

三　法律ニ背キ管轄違又ハ管轄ナリトノ言渡若クハ管轄ニ非サル裁判所ニ事件ヲ移スノ言渡アリタル時

四　法律ニ於テ無效ノ記載アル規則ニ背キタル時又ハ無效ノ記載ナキ規則ニ背キタルニ因リ異議ノ申立アリタル場合ニ於テ之ヲ認可セサル時

五　法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサル時

六　法律ニ定メタル場合ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽カサル時

七　裁判所ニ於テ請求ヲ受ケタル事件ニ付キ判決ヲ爲サス又ハ職權ヲ以テ判決スルヿヲ得可キ場合ヲ除クノ外請求ヲ受ケサル事件ニ付キ判決ヲ爲シタル時

八　裁判言渡ヲ公行セス又ハ傍聽ヲ禁スルノ言渡ナクシテ訊問及ヒ辯論ヲ公行セサル時

九　事實及ヒ法律ニ依リ言渡ノ理由ヲ付セス又ハ其理由ノ齟齬アル時

十　擬律ノ錯誤アル時

十一　越權ノ處分アル時

第四百十一條　免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テハ被告人ノ利益ノ爲メ定メタル規則ニ背キタルヿ又ハ犯罪ノ場所ニ因リ管轄違アリト雖モ上告ヲ爲スヿヲ得ス

第四百十二條　民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ私訴ニ關

スル豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ第四百十條ニ定メタル原由ニ付キ上告ヲ爲スヿヲ得

第四百十三條　上告ノ對手人ハ大審院ノ判決アルマテ何時ニテモ附帶ノ上告ヲ爲スヿヲ得

大審院掛事長モ亦附帶ノ上告ヲ爲スヿヲ得

第四百十四條　上告ノ期限ハ三日ナリトス但豫審ニ付テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ起算シ公判ニ付テハ言渡アリタルヨリ起算ス

第四百十五條　豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ上告アリタル時ハ勾留保釋責付釋放及ヒ放免ノ言渡ヲ除クノ外其執行ヲ停止ス

第四百十六條　上告ヲ爲サントスル者ハ其申立書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

上告ノ申立書ハ其申立アリタルヨリ二十四時內ニ書記ヨリ之ヲ對手人ニ送達ス可シ

第四百十七條　上告申立人ハ其申立ヲ爲シタルヨリ五日內ニ趣意書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ上告趣意書ヲ受取リタルヨリ二十四時內ニ之ヲ對手人ニ送達ス可シ

第四百十八條　對手人ハ上告趣意書ヲ受取リタルヨリ五日內ニ答辯書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ其答辯書ヲ受取リタルヨリ二十四時內ニ之ヲ上告申

立人ニ送達ス可シ

第四百十九條　檢察官ヨリ差出ス可キ上告趣意書又ハ答辯書ハ二通ヲ作リ一通ヲ大審院ニ差出シ一通ヲ對手人ニ送達ス可シ

私訴ノ裁判言渡ニ對シ訴訟關係人ヨリ差出ス可キ上告趣意書又ハ答辯書ニ付テモ亦同シ

第四百二十條　書記ハ前數條ニ定メタル期限經過シタル後速ニ訴訟書類及ヒ上告書類ヲ其裁判所ノ檢察官ニ差出ス可シ

檢察官ハ其書類ヲ五日内ニ大審院檢事長ニ差出シ且意見アル時ハ之ヲ添フ可シ

檢事長ハ上告事件ヲ刑事局ノ綴冊ニ登記ス可キヿヲ院長ニ請求ス可シ

第四百二十一條　上告申立人及ヒ對手人ハ代言人ヲ差出スヿヲ得

重罪ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者上告ヲ爲シ又ハ檢察官ヨリ重罪ノ刑ニ該ル可キ者トシテ上告ヲ爲シタル場合ニ於テ刑ノ言渡ヲ受ケタル者自ラ代言人ヲ選任セサル時ハ院長ノ職權ヲ以テ其院所屬ノ代言人中ヨリ之ヲ選任ス可シ

第四百二十二條　院長ハ刑事局判事中ニテ專任判事一名ヲ命ス可シ

專任判事ハ一切ノ書類ヲ檢閲シ其報告書ヲ作ル可シ但自己

ノ意見ヲ付スル可カラス

第四百二十三條　上告申立人及ヒ對手人ハ專任判事ノ報告書ヲ差出スマテハ大審院書記局ヲ經由シテ其趣意ヲ擴張スル可キ辯明書ヲ差出スヿヲ得

專任判事報告書ヲ差出シタル後辯明書ヲ差出シタル時ハ之ヲ其報告書ニ添フ可シ

第四百二十四條　書記ハ開廷ヨリ三日前ニ開廷ノ日時ヲ上告申立人及ヒ對手人ノ代言人ニ報知ス可シ

第四百二十五條　開廷ノ日ニハ公廷ニ於テ專任判事其報告書ヲ朗讀ス可シ

撿事長及ヒ代言人ハ各其趣意ヲ辯明ス可シ

私訴ノ上告ニ付テハ撿事長最終ニ其意見ヲ陳述ス可シ

第四百二十六條　上告申立人又ハ對手人ヨリ代言人ヲ差出サヽル時ハ其儘ニテ判決ヲ爲ス可シ

第四百二十七條　大審院ニ於テ上告ノ理由ナシトスル時ハ之ヲ棄却スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第四百二十八條　大審院ニ於テ豫審又ハ公判ノ言渡ニ對スル上告ニ付キ破毀ノ原由アリトスル時ハ其言渡ノ全部ヲ破毀シ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ但後ノ數條ニ記載シタル場合ハ此限ニ在ラス

第四百二十九條　擬律ノ錯誤若クハ法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサルヿニ因リ原裁判言渡ヲ破毀シタル時ハ其事

件ヲ移スヿナク大審院ニ於テ直チニ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第四百三十條　豫審又ハ公判ノ手續規則ニ背キタルヿアリトスルトキハ其後ノ手續ニ利害ヲ及ホサヽル時ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スヿナク止タ其手續ヲ破毀ス可シ

第四百三十一條　豫審又ハ公判ノ言渡ノ幾分ニ對シ上告アリタル場合ニ於テ他ノ部分ニ關係アラサル時ハ大審院ニ於テ其上告ニ係ル部分ヲ破毀シ法律ニ從ヒ直チニ相當ノ裁判言渡ヲ爲シ又ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移ス可シ

第四百三十二條　大審院ニ於テ原裁判言渡ヲ破毀シ直チニ裁判言渡ヲ爲シタル時ハ原裁判所又ハ他ノ裁判所ヲシテ其執行ヲ爲サシム可シ

第四百三十三條　大審院ニ於テ破毀シタル事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可キ時ハ原裁判所ニ接近シタル同等ノ裁判所ヲ定示ス可シ其單ニ私訴ニ係ル事件ハ之ヲ民事裁判所ニ移ス可シ

第四百三十四條　法律ニ係ル大審院ノ判決ハ確定ノ者トス

大審院ヨリ送付ヲ受クタル裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ上告ヲ爲スヿヲ得

第四百三十五條　法律ニ於テ罰セサル所爲ニ對シ刑ヲ言渡シ又ハ相當ノ刑ヨリ重キ刑ヲ言渡シタル場合ニ於テ定期内ニ上訴スル者ナクシテ其裁判言渡確定シタル時ハ大審院檢事長ヨリ司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ何時ニテモ非常上

告ヲ爲スヿヲ得

非常上告アリタル時ハ原裁判言渡ヲ破毀シ大審院ニ於テ直チニ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第四百三十六條　左ノ場合ニ於テハ大審院ノ裁判言渡ニ對シ檢事長其他訴訟關係人ヨリ其院ニ哀訴スルヿヲ得

一　大審院ニ於テ前數條ニ定メタル式ヲ履行セサル時

二　訴訟關係人ヨリ申立タル條件ニ付キ判決ヲ爲サヽル時

三　同一ノ裁判言渡ニ付キ二箇ノ條件離隔シタル時

第四百三十七條　哀訴ヲ爲サントスル者ハ裁判言渡アリタルヨリ三日內ニ書記局ニ其申立ヲ爲ス可シ

書記ハ申立書ヲ受取リタルヨリ三日內ニ之ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ同一ノ期限內ニ其答辯書ヲ差出ス可シ

大審院ニ於テハ通常上告ノ規則ニ從ヒ哀訴ノ判決ヲ爲ス可シ

第四百三十八條　大審院ノ裁判言渡ハ其言渡アリタルヨリ三日間又哀訴アリタル時ハ其判決アルマテ執行ヲ停止ス

第二章　再審ノ訴

第四百三十九條　再審ノ訴ハ左ノ場合ニ於テ重罪輕罪ノ刑ノ言渡ニ對シ被告人ノ利益ノ爲メ之ヲ爲スヿヲ得但裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ爲スヿヲ得ス

一　人ヲ殺シタル罪ニ付キ刑ノ言渡アリタル後其言渡ノ日

二當リ殺サレタリト認メラレシ者現ニ生存シ又ハ犯罪前既ニ死去シタルノ確證アリタル時

二 同一ノ事件ニ付キ共犯ニ非スシテ別ニ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタル時

三 犯罪アル以前ニ作リタル公正ノ證書ヲ以テ當時其場所ニ在ラサルヿヲ證明シタル時

四 被告人ヲ陷害シタル罪ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタル時

五 公正ノ證書ヲ以テ訴訟書類ニ僞造又ハ錯誤アルヿヲ證明シタル時

第四百四十條 再審ノ訴ヲ爲スヿヲ得可キ者左ノ如シ

一 刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官

二 刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ヲ管轄スル控訴裁判所ノ檢事長

三 大審院檢事長但司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲スヿ可シ

四 刑ノ言渡ヲ受ケタル者

五 刑ノ言渡ヲ受ケタル者死去シタル時ハ其親屬

第四百四十一條 再審ノ訴ハ刑ノ消滅シタルニ拘ハラス何時ニテモ之ヲ爲スヿヲ得

第四百四十二條 再審ノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意書ニ原裁判言渡書ノ謄本及ヒ證據書類ヲ添ヘ之ヲ原裁判所ノ書記

局ニ差出ス可シ

原裁判所ノ檢察官ハ其書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ大審院檢事長ニ差出ス可シ

原裁判所ノ檢察官及ヒ控訴裁判所檢事長自ラ再審ノ訴ヲ爲サントスル時ハ前項ノ手續ニ從ヒ其書類ヲ差出ス可シ

第四百四十三條　大審院ニ於テハ檢事長ノ請求ニ因リ速ニ專任判事一名ヲシテ其取調ヲ爲シ報告書ヲ差出サシム可シ

第四百四十四條　大審院ニ於テハ他ノ事件ヲ閣キ刑事局判事全員會議局ニ集會シ專任判事ノ報告書及ヒ檢事長ノ意見書ニ依リ判決ヲ爲ス可シ

第四百四十五條　大審院ニ於テ再審ノ原由アルヿヲ認メタル時ハ原裁判言渡ヲ破毀シ公訴及ヒ私訴ニ付キ再審ヲ爲ス可キヿヲ言渡シ其事件ヲ原裁判所ト同等ナル他ノ裁判所ニ移ス可シ

其送付ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ通常ノ規則ニ從ヒ裁判ヲ爲ス可シ

第四百四十六條　死者ノ親屬ヨリ再審ノ訴ヲ爲シタル場合ニ於テ大審院ニテ再審ノ原由アルヿヲ認メタル時ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スヿナク原裁判言渡ヲ破毀ス可シ

第四百四十七條　再審ノ裁判ニ因リ無罪ノ言渡アリタル時又ハ前條ノ場合ニ於テ破毀ノ言渡アリタル時ハ其者ノ名譽ヲ復スル爲メ其言渡書ヲ掲示公告ス可シ

第三章　裁判管轄ヲ定ムルノ訴

第四百四十八條　通常裁判所ト特別裁判所トヲ問ハス管轄ニ非サルノ言渡ヲ爲シ其言渡確定シタル時又忌避ノ原由若クハ非常ノ事變ニ因リ訴訟事件ヲ管理スル能ハサル時ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲スヿヲ得

大審院檢事長ハ司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲スヿヲ得

第四百四十九條　裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意書ニ訴訟書類ヲ添ヘ之ヲ大審院ノ書記局ニ差出ス可シ

第四百五十條　大審院ニ於テハ刑事局判事五名以上會議局ニ係會シ專任判事ノ報告書及ヒ檢事長ノ意見書ニ依リ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ判決シ其事件ヲ管理ス可キ裁判所ヲ定ス可シ

第四章　公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴

第四百五十一條　犯罪ノ性質被告人ノ身分員數地方ノ民心其他重大ナル事情ニ因リ裁判ニ對シ紛擾又ハ危險ヲ生スルノ恐アル時ハ公安ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スヿヲ得

第四百五十二條　公安ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ司法卿ノ命ニ因リ大審院檢事長ヨリ其院ニ之ヲ爲ス可シ

第四百五十三條　大審院ニ於テハ會議局ニテ訴訟關係人ノ申立ヲ聽クヿナク速ニ前條ノ訴ヲ判決ス可シ

第四百五十四條　被告人ノ身分地方ノ民心又ハ訴訟ノ模樣ニ因リ裁判ノ公平ヲ維持スルヿ能ハサルノ恐アル時ハ嫌疑ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スヿヲ得

第四百五十五條　嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ管轄裁判所ノ檢察官其他訴訟關係人ヨリ之ヲ爲スヿヲ得

民事原告人嫌疑アル裁判所ニ私訴ヲ爲シ又被告人其裁判所ニ於テ異議ノ申立ナクシテ本案ニ付キ辯論ヲ爲シタル時ハ前項ノ訴ヲ爲スヿヲ得ス

第四百五十六條　嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ヲ爲スニハ其趣意書二通ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ速ニ一通ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ其送達アリタルヨリ三日内ニ答辯書ヲ差出スヿヲ得

第四百五十七條　大審院ニ於テハ第四百五十條ノ規則ニ從ヒ前條ノ訴ヲ判決ス可シ

第四百五十八條　嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴アリタル時ハ裁判所ニ於テ其訴訟手續ヲ停止ス

第六編　裁判執行復權及ヒ特赦

第一章　裁判執行

第四百五十九條　重罪輕罪違警罪ノ刑ハ裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ執行ス可カラス

第四百六十條　死刑ノ言渡確定シタル時ハ檢察官ヨリ速ニ訴訟書類ヲ司法卿ニ差出ス可シ

司法卿ヨリ死刑ヲ執行ス可キノ命令アリタル時ハ三日内ニ其執行ヲ爲ス可シ

第四百六十一條　死刑ヲ除クノ外刑ノ言渡確定シタル時ハ直チニ之ヲ執行ス可シ

第四百六十二條　刑ノ執行ハ原裁判所ノ檢察官又ハ大審院ヨリ命ヲ受ケタル裁判所ノ檢察官ノ指揮ニ因リ之ヲ爲ス可シ

罰金科料裁判費用及ヒ没收物品ハ檢察官ノ命令書ニ依リ之ヲ徵收ス可シ

破壞又ハ廢棄ス可キ没收物品ハ檢察官之ヲ處分ス可シ

第四百六十三條　死刑ノ執行ニ付テハ書記其始末書ヲ作リ刑ノ執行規則ニ從ヒ立會ヲ爲シタル官吏ト共ニ署名捺印ス可シ

其他刑ノ執行ニ關スル方法細目ハ別ニ規則ヲ以テ之ヲ定ム

第四百六十四條　裁判言渡確定シ又ハ闕席裁判アリタル時ハ其刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ書記既決犯罪表ヲ作リ左ノ條件ヲ記載ス可シ但大審院ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲シタル時ハ其執行ヲ爲シタル裁判所ノ書記之ヲ作ル可シ

一　犯人ノ氏名年齡職業住所及ヒ出生ノ地

二　罪名刑名
三　再犯
四　裁判言渡ヲ爲シタル年月日
五　對審裁判又ハ闕席裁判

第四百六十五條　既決犯罪表ハ二通ヲ作リ一通ヲ司法省ニ送致シ一通ヲ其裁判所ノ書記局ニ藏置ス可シ
遞警罪ノ既決犯罪表ハ一通ヲ作リ其裁判所ノ書記局ニ藏置ス可シ

第四百六十六條　刑ノ言渡ヲ受ケタル者其言渡ノ條件ニ付キ疑義ノ申立又ハ其執行ニ付キ異議ノ申立ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ於テ之ヲ判決ス可シ

第四百六十七條　刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡ノ後捕ニ就キタル場合ニ於テ人違ノ申立アリタル時ハ之ヲ認定スル爲メ前ニ其罪ヲ認メタル裁判所ニ送致ス可シ
裁判所ニ於テ本犯ナルヿヲ認定スルヿ能ハサル時ハ事實參考ノ爲メ曾テ其事件ニ干預シタル裁判官檢察官書記又ハ原被ノ證人ヲ呼出スヿヲ得

第四百六十八條　前二條ノ場合ニ於テハ公廷ニテ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ノ申立及ヒ檢察官ノ意見ヲ聽キ裁判言渡ヲ爲ス可シ但其言渡ニ對シテハ上訴ヲ許サス

第四百六十九條　賠償及ヒ訴訟關係人ニ償還ス可キ裁判費用ニ付キ其言渡ノ執行ハ通常民事ノ規則ニ從フ

第四百七十條　復權ノ願ハ刑法第六十三條ニ定メタル期限經過シタル後刑ノ言渡ヲ受ケタル者ヨリ司法卿ニ之ヲ爲ス可シ

復權ノ願書ニハ本人署名捺印シ現ニ住スル地ノ始審裁判所檢事ニ之ヲ差出ス可シ

第四百七十一條　復權ノ願書ニハ左ノ書類ヲ添フ可シ

一　裁判言渡書ノ謄本

二　主刑ノ滿期特赦又ハ期滿免除ト爲リタルヿヲ證明スル書類

三　假出獄及ヒ假ニ監視ヲ免セラレタルノ證書

四　賠償及ヒ裁判費用ヲ辨濟シ又ハ其義務ヲ免カレタルノ證書

五　過去現在ノ住所及ヒ生計ヲ記載スル書類

第四百七十二條　檢事ハ願人ノ品行其他必要ノ取調ヲ爲シ前條ノ書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ控訴裁判所檢事長ニ差出ス可シ

第四百七十三條　檢事長ハ更ニ必要ノ取調ヲ爲シ復權ノ願ニ關スル書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ司法卿ニ差出ス可シ

第四百七十四條　司法卿ハ復權ノ願ニ關スル書類ヲ檢閲シ其願ヲ允許ス可キ者ト認メタル時ハ速ニ上奏ス可シ

第四百七十五條　勅裁又ハ司法卿ノ意見ニ因リ復權ノ願ヲ棄

却シタル時ハ司法卿ヨリ其旨ヲ控訴裁判所檢事長ニ通知シ檢事長ヨリ願書ヲ差出シタル始審裁判所檢事ニ通知ス可シ

前項ノ場合ニ於テハ刑法第六十三條ニ定メタル期限ノ半ヲ經過スルニ非サレハ更ニ其願ヲ爲スヿヲ得ス

更ニ復權ノ願ヲ爲スニ付テモ亦前數條ノ規則ニ從フ

第四百七十六條　復權ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ其裁可狀ヲ控訴裁判所檢事長ニ送致シ檢事長ヨリ願書ヲ差出シタル始審裁判所檢事ニ送致ス可シ

檢事ハ裁可狀ノ謄本ヲ願人ニ下付ス可シ

又刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ裁可狀ノ謄本ヲ送致シ其裁判所ニ於テハ之ヲ裁判言渡書ニ記入ス可シ

第三章　特赦

第四百七十七條　特赦ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ檢察官又ハ監獄長ヨリ犯人ノ情狀ヲ具シ司法卿ニ申立ルヿヲ得

監獄長ヨリ特赦ノ申立ヲ爲ス時ハ檢察官ヲ經由ス可シ但檢察官ハ意見書ヲ添フ可シ

特赦ノ申立アリタル時ハ司法卿ヨリ其書類ニ意見書ヲ添ヘ上奏ス可シ

第四百七十八條　司法卿ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ特赦ノ申立ヲ爲スヿヲ得

死刑ヲ除クノ外特赦ノ申立アリト雖モ刑ノ執行ヲ停止セ

第四百七十九條　特赦ノ申立棄却アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ其旨ヲ通知ス可シ

第四百八十條　特赦ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ特赦狀ヲ送致ス可シ此場合ニ於テハ第四百七十六條ノ規則ニ從フ

裁判管轄　一丁
陪席判事　仝丁
准現行犯　仝丁
家宅搜索　二丁
司法警察官　仝丁
令狀　仝丁
被告人貴付手續　三丁
違警罪裁判　仝丁
違警罪審判手續　四丁
刑事ノ控訴　仝丁

陪席補充判事　二丁
檢察官ノ起訴　五丁
勾引シタル被告人　仝丁
書記局其他訟廷等ノ掌務心得書　六丁
使丁規則　仝丁
守卒　七丁
治安裁判所　十二丁
制除合併　仝丁
輕罪裁判所　十三丁
北海道及ヒ沖縄縣ノ裁判　十四丁
札幌根室ノ各始審裁判所　十五丁
沖縄縣重罪犯處分　十六丁
裁判所改稱　仝丁
治安裁判所及ヒ始審裁判所ノ權限　仝丁
送達書呼出狀召喚狀勾留狀收監狀宣誓書式　十八丁
辯護人　仝丁
檢證及ヒ物件差押　十九丁
物件差押ノ件　仝丁
所屬代言人規則　二十丁
裁判言渡書ノ謄本拔書　二十一丁
謄本無代假下渡　仝丁

控訴上告費用豫納　二十二丁
徵收手續　二十三丁
無能力者代人民事擔當人　仝　丁
撿事豫審判事訊問時間　二十五丁

治罪法參考諸布告目錄

治罪法參考諸布告
○裁判管轄（明治十四年第四拾六號布告）
治罪法第四十條ニ犯罪ノ地ヲ以テ裁判管轄ト規定之アリ候得共當分ノ內犯罪分明ナル被告人ト雖モ管轄裁判所ヨリ囑託アリタル時ハ其被告人逮捕ノ地ノ裁判所之ヲ管轄スヘシ
○陪席判事（仝上）
治罪法第七十三條第二項ニ陪席判事四名ト之アリ候得共當分ノ內二名ト相定メ候事
○准現行犯（仝上）
治罪法第百一條ニ准現行犯ノ場合列記之アリ候處其擧動犯人ト思料スヘキ者アル時ハ當分ノ內現行犯ニ准シ處分スル事ヲ